
アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

【Nコード】

N2850X

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

アイドル探偵第9弾！トップアイドル・KAZU（和彦）が結婚！？寿々菜をはじめ、ファン達は大騒ぎ。ところが和彦の婚約者・栄子が突如ホテルから姿を消した。残された部屋は血まみれで・・・。

第1話 スクープ！

鳥居聡子、28歳。

身長164センチ、体重●●キロ。

さらさらの黒髪と少し目尻が上がった瞳が、その聡明さと潔さを表している。

そんな鳥居の職業は、誰もが納得の婦人警官だ。しかも鳥居はノルマ達成のために違反切符を切りまくるような婦人警官ではなく、まさに「市民の味方」の名に恥じない婦人警官である。

警視庁捜査一課2年目の武上刑事にとっても良き先輩であり、公私共にお世話になっている。

が。そんな鳥居にも欠点、というか弱点がある。

それも武上に言わせれば、致命的とも言える弱点が。

「鳥居さん、どうしたんですか？」

警視庁内の食堂で昼食を取っていた武上は、扉から入ってきた鳥居を見て思わず声をかけた。

「ああ・・・武上君・・・こんばんは」

「・・・」

一応説明しておく、今は夜ではなく昼の12時である。鳥居がここまで元気がないのは珍しい。何かよほどのことがあったのだろう。

「落ち込んでますねー。鳥居さんが落ち込むなんて、原因はさてはKAZU関係ですね？」

武上の横でいつも通りサンドイッチを上品に食べている1年目のお坊ちゃま刑事・和田が鳥居にそう言つと、鳥居の顔つきが変わつた、かと思つたら。

「と、鳥居さん！泣かないで下さいよ！」

武上は慌てて箸を置き、テーブルの下で和田の足を踏みつけてから鳥居に駆け寄つた。鳥居が泣くなど、初めてのことだ。これは本当にただ事ではないらしい。

和彦の奴！鳥居さんに何かしたのか！？

「和彦」とは、和田が先ほど言っていた人気アイドル・KAZUのことである。

KAZUは世の女性達の心をわし掴みにしているだけでなく、武上が密かに（？）思いを寄せている女子高生・白木寿々菜（しゅすな）の心も思いつきりわし掴んでおり、武上にとっては全くもって面白くない人物なのである。

しかしどういふ運命の悪戯か、武上は知り合いたくもないのに和彦と知り合いで、和彦の女癖の悪さはよく分かつている。だから鳥居に何かしたのではと心配したのだが、冷静に考えてみれば、人気アイドルと一般女性（しかも婦人警官）の間に何かあるわけもなく。

いや、和彦ならやりかねない！

武上は鳥居の両肩を掴んだ。

「鳥居さん！何があったんですか！？場合によっちゃ和彦を、」
「・・・これ見て」

鳥居は鼻をすすりながら、肩に掛けていたショルダーバックから雑誌を取り出した。ファッション雑誌ではなく、毎週発行されているペラペラの「○×セブン」である。ということはやはり和彦関係なのだろうか。

武上は鳥居から雑誌を受け取り、その表紙を見た。案の定、そこにはデカデカと和彦・・・いや、営業スマイルで武装したKAZUの顔のアップが載っていた。こんなもんを見てキヤーキヤー言う女心は武上には一ミクロンたりとも分らないのだが、まあ今はいい。一体この雑誌に何が書かれているというのか。

武上が和彦の顔の下に書かれた文字に目を移したその時、食堂の一角から「キヤー」「イヤー」という悲鳴が上がり、続いて「おー！」という歓声が上がった。見ると、テレビが置かれている周辺でその騒ぎが起こっているようである。

武上は雑誌を見るのを一時中断し、和田と顔を見合わせた後、動こうとしない鳥居を置いてテレビの方に向かった。既にそこには人垣ができており、みんな壁に掛けられたテレビを見上げている。

「どうしたんですか？何か大きな事件でもあったんですか？」

テレビの前の席にずっと座って食事をしていたベテラン刑事に武上が訊ねると、ベテラン刑事は苦笑いをした。

「まあ、大きな事件と言えば大きな事件だな。ただし俺達の出る幕はない」

「え？」

「ほら、見てみ」

指を差されてテレビを見ると、武上の手の中にある雑誌の表紙と同じ笑顔がそこにあった。本性を知らなければ確かに爽やかな笑顔に見えるが、武上にはもう悪魔の微笑みにしか見えない。

その悪魔の微笑みに大きなテロップが重なる。

「え？結婚？」

和田が武上より早く、そのテロップの意味を認識し、文字をそのまま声に出した。

武上も一歩遅れて、ようやくその意味を理解する。

「・・・結婚？え、結婚、って結婚？和彦が！？」

またテレビの周辺から「ヤダー」と女性達の悲鳴が上がる。しかしもう武上の耳にその悲鳴は届かない。

いや、和彦が結婚しようとしまいと、武上には関係ない。だが、問題は和彦の結婚相手だ。

まさか、寿々菜さん！？

ま、待て。寿々菜さんはまだ高校生だ。でも、和彦はそんなこと気

にする奴じゃないし・・・
もしかして「できちゃった婚」とか・・・

「まさか！！！寿々菜さんに限ってそんなこと！！！」

和田がため息をつく。

「武上さんて面白いですよ。何を考えてるかすぐ分かります。あ、ほら、容疑者の情報が出ましたよ」

「寿々菜さんを容疑者って言うな！」

「まだスウが容疑者と決まったわけじゃないでしょう」

完全な職業病だが今はそれどころではないのでスルーしておこう。
とにかく容疑者（結婚相手のことだ）の情報収集が最優先だ。

武上と和田は穴が開くほどテレビを見つめた。
そこには新たなテロップでこう書かれていた。

『ホテルマンが暴露、KAZUが結婚式の予約に来た！お相手は一般女性！！！！』

「・・・」

武上は判断に困った。寿々菜は一応和彦と同じ事務所に所属している「スウ」という芸名の芸能人だ。しかし「一応」も「一応」で、ほとんど一般人と言ってもいいくらいである。この「一般女性」が寿々菜かどうかは微妙なところだ。

「あ、でも、スウじゃないみたいです。ほら、モザイクの写真が

出てます」

なるほど、確かに和田の言う通り、堂々と腕を組んで高級ホテルの正面玄関から出てくるカップルの写真がテレビに映されている。男の方はサングラス姿とは言え間違いないと和彦だ。女性の顔にはモザイクがかかっているのだが・・・

「スウはあんなにスタイル良くないですからねー」
「・・・」

寿々菜の為に反論してやりたいところだが、悲しいかな武上といえども反論の余地はない。

和彦の横に映っている女性は抜群のスタイルだ。顔は見えないがおそらく美人に違いない。

一方、寿々菜は・・・。。。。。。

「でも僕はスウの方がタイプですね。顔も体型も愛嬌があるって言うか」

「和田！」

と、武上は口で怒りながらも、心の中では和田に激しく同意していた。

そうだ。寿々菜さんには寿々菜さんの良さがあるんだ。
あんな女、目じゃないぞ。

世の男性の何割が武上と和田に同調してくれるかは怪しいところだが、取り敢えず和彦の結婚相手が寿々菜ではないことが分かったの

で、武上は胸を撫で下ろした。
と同時に、改めて驚きが込み上げてくる。

「和彦が結婚か……。本当か？何かの間違いじゃないのか？」

「でもホテルマンが、KAZUが結婚式の予約に来たって言ってるんですよ？他の人の結婚式の予約なんかしないだろうし、間違いないでしょう」

「でもあいつまだ21歳だぞ」

「しかもこの人気絶頂期に結婚だなんて、よく事務所が許しましたよね」

「・・・あ」

武上はここに来てようやくある2人の顔を思い出した。

三十路男ながらに和彦に恋するマネージャー・山崎と……。どこまでも金にうるさい事務所の所長・門野の顔である。

第2話 失意の寿々菜

白木寿々菜、16歳。

身長160センチ、体重●●キロ。

クリンとしたボブと少し目尻の下がった瞳が、その愛嬌の良さとお人好しさ・・・もとい、人柄の良さを表している。

しかし常にお気楽ご気楽・・・再びもとい、前向きな寿々菜と言えども、今回ばかりはシヨックが大き過ぎた。

学校で友達から見せられた週刊誌の中の、和彦の結婚報道。KAZUファンが高じて芸能界入りした寿々菜にとっては、これから自分が進むべき道が突然断たれた様な気分である。もちろん、純粋な失恋という痛手もそれに加わる。

和彦さん、結婚するだなんて一言も言ってなかったのに・・・

寿々菜が重い重い足取りで学校の門をくぐると、そこに見慣れた人影が立っていた。

武上である。

勤務中なのか、武上の後ろに止まっている車は寿々菜も何度か乗ったことのある覆面パトカーだ。助手席に見える人影は武上の先輩兼パートナーの三山刑事に違いない。

もちろん刑事が勤務中に油を売るなど言語道断なのだが、そこは優しい三山、武上の「恋」を影ながら応援してくれている。

「寿々菜さん！」

「武上さん・・・どうしたんですか？」

いつもの笑顔も作れず、寿々菜は無表情のまま武上に歩み寄った。

「お仕事ですか？」

「いえ。ちよつと寿々菜さんのことが心配で。・・・大丈夫ですか？」

どう見ても大丈夫そうではないが、そう訊ねるしかない。

武上は、覚悟はしていたが、ショックを受けている寿々菜にショックを受けた。

「武上さんも知ってるんですか？和彦さんの結婚のこと」

「昼間にテレビで見ました。雑誌でも」

「そうですか・・・私も雑誌で見ました。顔は映されてなかったけど、綺麗な感じの人ですね」

「寿々菜さん・・・」

いつになく僻^{ひが}みっぽい寿々菜に、武上は更にショックを受けた。

あの天使のように純粋な寿々菜さんにここまで思い詰めさせるなんて・・・

和彦、お前酷い奴だな。

武上とて人間だ、強力なライバルがいなくなったことが嬉しくないでもない。和彦が自分を慕っている寿々菜に手を出さなかったことから分かるように、和彦は和彦なりに寿々菜を大切にしていた。いつかそれが恋心になる日があるのではないかと、ヒヤヒヤした

こともある。

しかし武上が望んでいたのはこんな勝利ではない。同じ条件の元で寿々菜が和彦ではなく武上を選んでこそ、本当の勝利だ。

これじゃ、勝ち逃げと同じじゃないか。

武上は心の中でひとしきり和彦に文句を言ってみたものの、もちろん本人に聞こえるはずもなく。
やはり（？）文句は面と向かって言わなくてはならない。

だがその前に、今日の前で沈みかけている沈黙の艦隊の救出が先である。

「す、寿々菜さん！その・・・あの、和彦はなんて言ってるんですか？」

寿々菜は力なく首を左右に振った。どうやらまだ和彦とは直接話していないらしい。

好きな女が失恋して落ち込んでいる。これ以上ないチャンスだ。しかし、その心の隙につけるには、武上は少々優しすぎた。

「じゃあまだ、あの報道が本当かどうか分からないじゃないですか！もしかしたら、とんでもない勘違いかもしれませんし！」

「はい・・・」

「あ、事務所はどうです？門野社長や山崎さんはどう言ってます？」

寿々菜はまた首を横に振った。だが今度は先ほどとは意味が違うよ

うだ。

「2人とも全く何も知らないみたいです。社長はカンカンだし、山崎さんはパニックしてました。和彦さんは携帯の電源を切ってて、捕まらないそうです」

やっぱり。

武上は心の中で頷いた。事務所に話しても反対されるのは目に見えている。和彦なら入籍するまで周囲に隠すことくらいは平気でやりそうだ。

つまり・・・和彦は本気で結婚するつもりってことか。

寿々菜には申し訳ないが、武上はそう結論付けた。しかしやはり寿々菜に正直にそうとは伝えられない武上である。

「寿々菜さん！本人に聞くまでまだ分かりませんよ！とにかく一度、事務所に行きましょう」

「え？一緒に行ってくれるんですか？」

「・・・」

武上は詰まった。「事務所に行きましょう」は「一緒に行きましょう」という意味で言ったのではない。武上は勤務中である。

だが、単なる疑問形ではなく期待の籠った寿々菜の口調に武上が逆らえるはずもなく。

というか、積極的に受け入れたいくらいだ。

武上は拝むような目で後ろに止まっている覆面パトカーを見た。
助手席で三山がため息をついたのは言うまでもない。

寿々菜と「特別離業中」の武上が、和彦と寿々菜の所属する門野プロダクションに着いたのはそれから小一時間後のことだった、が、そこはまさに戦場。寿々菜はその光景に目を丸くした。

「すごい・・・」

「みんな暇だな」

「みんな」も仕事をサボっている武上に言われたくないだろうが、武上がそう言うのも無理はない。門野プロダクションが入っているビルの前には報道陣と悲壮な面持ちの女性ファン達が、大挙して押し寄せてきていたのだ。ザッと見積もってもその数は有に200を越えるだろう。

ちなみに、その群集の真後ろにいる「スウ」こと寿々菜に誰も気付かないのは、みんなKAZUの結婚報道に夢中だからではなく、スウの知名度の問題である。

「どうしよう・・・入れそうにありませんね」

寿々菜ががっかりしたように肩を落とす。

「いや、寿々菜さんは事務所の人間だから・・・ちょっと、すみません！」

武上は寿々菜の前に立ち、肩で群集を掻き分けて行った。事件現場

だと思えば大したことはない・・・こともない。

くそっ！たかが芸能人の結婚で、よくみんなここまで熱くなれるな！

武上と寿々菜はもみくちやにされながら1番前の列に辿り着き、プロダクションの警備員に「誰だっけ？」と首を傾げられるというオマケつきでなんとかビルの中に入ることができた。

「はあ！バーゲンみたいですね！」

「そ、そうですね」

武上はさすがに疲労困憊の態である。しかしここで立ち止まっている場合ではない。

2人はそれぞれ自分の中で気合を入れ直すと、エレベーターに向かって歩き出した。

「スウ！」

2人が振り向くとそこには、知らない人が見たら門野プロ所属の芸能人だと勘違いしてもおかしくない眼鏡にスーツのなかなかパリッとした男が立っていた。和彦のマナージャー、山崎だ。

「何しに来たんだ？仕事なんかないだろう」

「・・・」

和彦に密かに（？）想いを寄せる者同士犬猿の仲の2人、だが今は色んな意味で被害者同士でもある。

寿々菜は勝手に一時休戦を決めた。

「山崎さん！こんなところで何やってるんですか！？和彦さんは！？」

「昨日の夜に今日発売の雑誌の情報が流れてからずっと対応に追われてたんだ。ちょっと小休止だ」

山崎は右手に持ったコンビニの袋を軽く持ち上げた。久々の食事なのだろう、敏腕マネージャーの山崎の顔にもさすがに疲れの色が見える。

「和彦さんはまだ捕まらない。どこかに隠れてるんだろっな」

「そうですか・・・あの、社長は？」

「相変わらずカンカンだ」

「・・・・・・」

寿々菜と武上は視線を合わせた。

「全く、和彦さんは！勝手に結婚だなんて何を考えているんだか・・・」

山崎は一瞬ガツカリしたような表情になったが、すぐにマネージャーの顔に戻り、決然としてエレベーターに乗り込んだ。

寿々菜と武上也慌ててその後を追う。

「てことは、やっぱり和彦さんは本当に結婚するんですか？」

「ああ。和彦さん本人とは話せてないが、和彦さんが撮られたホテルに確認を取った。間違いなく和彦さんと女性が自分達の結婚式の予約をしていたそうだ」

寿々菜はため息をつきながら、最後の可能性に賭けた。

「和彦さんのそっくりさん、ってことは・・・」

「そんな人間がいるなら、スカウトしたいね」

山崎がそう言つてエレベーターを下り、事務所の扉を開いた、その時。

「よう、山崎、遅いじゃねーか」

聞きなれた声に3人は固まった。

探し求めていた人物が事務所の中の机に腰をかけ、ニヤニヤ笑つていたのである。

第3話 A子

「和彦さん！」

「和彦！」

寿々菜・山崎、武上が同時に叫ぶと、和彦は更にニヤニヤしたが、その後ろには和彦とは対照的に苦虫を噛み潰したようなダルマ・・・じゃなかった、門野社長が立っている。

武上が和彦に詰め寄る。

「和彦！今までどこにいたんだ！？」

「家」

「家！？でも、携帯に出ないって・・・」

「あー？電源切ったままだったかな」

「この大騒動を知らなかったのか！？」

和彦の笑顔が変わる。笑顔には違いないが、どこか達観したような笑顔だ。

「知ってるさ。だからどうせ仕事にならないだろうと思って、家で
のんびりしてた。いやー、人気者は困るね」

「お前な・・・寿々菜さんがどれだけ心配したと思って、」

「心配？何を心配するんだよ？」

和彦は武上の肩越しに寿々菜を見た。

ドキッとした寿々菜の顔から、和彦を見つけた驚きの表情が消える。

「よお、寿々菜。何してるんだ？仕事か？珍しいな」

「い、いえ・・・あの、和彦さん」
「ん？」

和彦が「なんだよ」というように首を傾げる。特段変わった様子はない。

いつもの和彦さんだ・・・。

きつとあの報道はデマだったんだわ。だから和彦さんもいつも通りなんだ。

そうよね、いくらなんでも本当に結婚するなら、こんなんびりと構えてないわよね。

寿々菜がそう納得して口を開こうとすると、それより先に和彦が寿々菜に話しかけた。

「あ、もしかして俺の結婚について聞きたいのか？」

「はい！あれってやつぱりデマ、」

「ちよつと急なんだけど、来月の10日に入籍して式も挙げるから。寿々菜も来るか？」

寿々菜が固まる。武上も山崎も同様だ。

1人表情を変えなかったのは門野だが、渋い表情のままということ。は既に和彦と話し合ったからなのだろう。

「え・・・結婚、するんですか？本当に？」

「ああ。雑誌に載ってたろ？あのホテルマンがリークしてくれたお陰でな」

そう言いつつ、和彦は怒っている様子ではない。
幸せな事なので、そんな些細なことは気にならないのか。

覚悟はしていたが、やはり本人の口から聞くと寿々菜は激しく動揺し、口を噤んだ。

代わりというわけでもないが、門野が口を開く。

「山崎」

「は、はい」

寿々菜と同じく呆然としていた山崎が門野社長の声で我に返る。

「和彦のワガママは今に始まったことじゃない。こいつは言い出したら絶対聞かない奴だ」

「はい・・・」

「世間にももうバレてる。ここは下手に逃げ隠れするより、堂々と発表しよう」

「・・・では、社長は和彦さんの結婚を認めるんですか？」

「認めなくても、こいつは勝手に結婚するだろ」

もちろんそれは和彦の性格に寄るところもあるが、結婚くらいでは人気は揺るがないという自信のなせる技だろう。

そして実際、もし勝手に結婚して門野プロダクションをクビになったとしても、和彦を欲しがっている事務所はたくさんある。

結局、人気のある者が強い世界だ。

「和彦。これは明らかに契約違反だ。給料を減らさせてもらっぞ」

「有料で記者会見開いたりインタビュー取ったりして俺の結婚で儲けるつもりのくせに、更に減給か。ケチだな」

「当然だ。山崎、記者会見の準備をしとけ」
「はい」

寿々菜は少し山崎に同情した。

山崎も男とはいえ寿々菜と同じように和彦に思いを寄せる者だ、今回のことがショックでない訳がない。それなのにマネージャーという立場上、社長には逆らえないし和彦の為になることなら例え自分の意思に反することでもやらなくてはならない。

それに引き換え寿々菜は・・・ただただ落ち込むことができる。

「寿々菜さん・・・元気出してください」

武上にそう言われて頷く寿々菜だが、さすがにいつもの元気は出ない。

なんと言っても結婚だ。ただのお付き合いとは訳が違う。

それにしても、いつの間に結婚を考えるほど真剣に女性と付き合い合っていたのだろうか。

「和彦、記者会見にはA子も連れて来い」

そう言う門野に和彦が「は？」という顔をする。

さすがの和彦も一般人の婚約者をカメラの前に出すのは気が引けるらしい・・・のかと思ったら。

「A子って誰だよ？」

「一般人の女は全部A子と決まってる」

「・・・まあなんでもいいけど。分かった連れてくるよ」

「いいのか？」

自分で言っておいて驚く門野。だいたい何事においても門野には楯突く和彦が、こうも簡単に自分の要求を飲むとは思わなかったのだ。しかも一般人の婚約者をテレビに出しても良いと言っているのだから、これはもう天変地異と言っていいだろう。

やっぱり本気なんだ、和彦さん。

だから自分の奥さんになる人をテレビに出しても平気なんだ。

「和彦さん・・・」

「・・・なんだよ寿々菜。泣くなよ」

和彦も寿々菜が自分に好意を寄せているのは百も二百も承知。さすがに少し申し訳なさそうな表情になる。

一方寿々菜は、涙ぐみながらも健気に笑顔を作った。

「私は和彦さんの幸せを願っています」

「寿々菜・・・」

「栄子さんとお幸せに!」

寿々菜は涙を拭き拭きクルリと反転し、和彦に背を向けた。

「は？栄子？A子の間違い、」

「お幸せに!」

スカートの裾を翻し事務所から走り出していく寿々菜を「だから栄子じゃないって!」という和彦の声が追いかけてきたのだった・・・。

「寿々菜さん・・・あの、大丈夫ですか？」

「・・・」

事務所の近くの公園のベンチで、まだ黄昏時でもないのに1人黄昏ている寿々菜に、武上は話しかけた。だがダメージは相当なものらしく、寿々菜は無言のままだ。

「あ、これ、食べませんか？さつき公園の入り口で買ったんですけど」

武上が差し出したのはホクホクと美味しそうな焼き芋だった。

寿々菜はチラリとそれを見て「今は食欲なんて・・・」と言いながらしっかりと焼き芋を受け取り、頬張った。

「ありがとうございます」

「いえ」

取り敢えず、食べ物が喉を通らない、というような状態ではないことが分かって武上はホツとし、寿々菜の隣に腰を下ろした。（そもそも寿々菜の喉を食べ物が通らないなんてことがあるとは思えないが）

「和彦さん、本当に結婚するんですね」

「・・・そうですね」

「栄子さん、どんな人なんでしょうか・・・」

ここで「いえ、A子です」と訂正できないのが武上。ちゃんと寿々菜に合わせてやる。

「和彦から聞きましたが、栄子さんは年上の女性だそうですよ」
「年上・・・」

和彦より5つも6つも年下の寿々菜にはとても勝ち目はないようだ。

「明日の夕方、早速記者会見をするそうです。寿々菜さんも行きま
すか？土曜ですし」

「寿々菜さんも、って・・・武上さん、行くんですか？」

「はい。さつき門野さんに『記者会見の間、和彦のボディガードを
やってほしい』と頼まれたので。ちょうど非番ですし、行くつもり
です」

正確には門野は「嫉妬深いファンが記者会見場に紛れ込んで、和彦
やA子に危害を加えないとも限らないから和彦とA子のボディガ
ードをやってほしい」と言ったのだが、寿々菜もファンという部類
に入る以上、寿々菜にそのまま門野の言葉は伝えられない。

もつとも武上に見れば、和彦が誰かに危害を加えられても一向
に気にならないが、やはり刑事として一般人女性・A子は守らな
くはと思う。

それに・・・まあ、めでたい事だからな。

今回くらいは和彦に協力してやってもいいだろう。

落ち込んでいる寿々菜には申し訳ないが、武上はそう思った。

第4話 記者会見

ホテルの大広間を借りての記者会見は、盛大な物だった。

何十ものカメラに百人を軽く超える取材陣。そしてそれと同じ位いるのが警備会社の人間だ。だが警備会社の人間はいわばカモフラージュのような物で、いざ和彦と婚約者が狙われた時に二人の前に飛び出すのは、マネージャーのような顔をして和彦の右隣に立っている武上の役目である。

くそつ。こんなの俺の仕事じゃないのに！

武上は会場中に視線を張り巡らせながら、司会をしているフリーアナウンサーの奥を見た。そこには開かれたままの扉があり、その奥は事務所関係者の控え室になっている。寿々菜と山崎、それに門野もそこで和彦の言葉に耳をそばだてているはずだ。

今度は高砂のように高い場所にあつらえられた壇上でスポットライトとカメラのフラッシュを浴びながら営業スマイル全開の和彦、いや、KAZUに目をやる。

武上もいい加減和彦の二重人格(?)には慣れているが、今日の笑顔は特別に見える。なんだか本当に心から笑っているようなのだ。そして和彦にそんな顔をさせているのが・・・

そう、和彦の左隣に座っているスラッとした美女である。

間違いない雑誌やテレビで顔をモザイク処理されていた女性・A子だ。武上も顔は今日初めて見たのだが、同一人物だと断言できる。あんなにスタイルの良い女性はそうそういないだろう。

スタイルだけではない。顔もスタイルを裏切っていない。

「それでは、KAZUさんとご婚約者様のご婚約会見を開かせて頂きます」

アナウンサーが嫌味なくらいよどみなく原稿を読み上げていく。ちなみに原稿は全て門野の都合のいいように、つまりKAZUのイメージを損なわないように作られている。

「なお、ご婚約者様は一般の方でいらっしゃいますので、お写真は普通に撮って頂いて結構ですが、名前は仮名で栄子さんとさせて頂きます」

・・・門野さん、原稿の内容を考えるのでいっぱいいっぱい、適当な仮名にしたな・・・？

武上は呆れたが、当の「栄子」はそんなことは全く気にしていない様子で、綺麗な栗色の巻髪を揺らしながら優雅に微笑んでいる。

一方の和彦もさすがに見た目は誰にも引けを取らない。悔しいが武上もお似合いだと言う他ない。

もつとも、そんなこと口が裂けても寿々菜の前では言えないが・・・

武上は寿々菜が心配になり、もう一度控え室へ目をやった。

その頃寿々菜は控え室の中から記者会見場の様子を見ていた。幸せそうな和彦と栄子。とてもじゃないが寿々菜などが入り込む余地はない。

しかし寿々菜は違和感を覚えていた。

寿々菜はご存知の通り、思い込みが激しく全てにおいて「鈍い」女の子だが、この違和感だけは推理が得意な和彦と刑事である武上のお墨付きだ。寿々菜が違和感を感じるところに、必ず何かおかしい事がある。

和彦は、寿々菜から見ても本当に幸せそうに見える。

だが・・・栄子の方は違う。

確かに幸せそうに和彦と微笑んでいるが、どこかぎこちない。一般人なのにいきなりこんな記者会見場に引っ張り出されて緊張しているのかもしれないが、それにしてもあまり「幸せオーラ全開！」という感じではない。

KAZUファンの人に気を使って、控えめにしてるだけなのかな。

なんかそれもちよつと違う気がするなあ・・・

私だったら、和彦さんと婚約記者会見なんかしたら、空の上まで飛んでいきそうなくらい幸せなのに。

寿々菜は、栄子がカメラマンの隙を見て小さくため息をついたのを見逃さなかった。

「はあー、終わった終わったー。疲れたなー」

門野が危惧していたようなことは起こらず、記者会見は無事に終了した。そして今ちようど和彦と栄子が控え室にさがってきたのだが、

その瞬間和彦の顔からKAZUSMILEが消え、いつもの人を小馬鹿にしたような表情に戻る。

それを見ても栄子が全く動揺しないところを見ると、和彦は栄子には本性を見せているらしい。

夫婦になるのだから当然と言えば当然なのだが、武上は少し驚き、寿々菜と山崎はショックを受けた。和彦は普段、ファンにはもちろん、大抵の人に対してKAZUモードを崩さないのだ。

「まあ、良かったんじゃないか」

1人満足そうなのは、自分の思い通りの記者会見にできた門野だけである。

「それにしても子供の頃からの知り合いと結婚とはな。下手にデキ婚なんかするより、ずっといい。場合によっちゃ『KAZUは一途だ』なんてイメージアップにもなるぞ」

「そりゃどーも」

和彦が適当に相槌を打つ。

「よくできた嘘だ」

ところが門野がそう言つと、和彦は少しムツとしたように言い返してきた。

「嘘じゃない。本当に子供の頃からの知り合いなんだよ。な？」

和彦が栄子を見ると、栄子は少し照れくさそうに頷いた。

「はい」

寿々菜は、記者会見でも栄子が少し話したのを聞いていたが、改めて栄子の声を聞くと声まで「美しい」のが良く分かる。美人というものは、どこをどう取っても美人なようだ。

「まあ、ずっと密かに付き合ってたっていうのは嘘だけだな」
「それなのにどうして急に結婚する事にしたんだ？」

武上が訊ねると、和彦はちょっと得意そうにこう言った。

「何年かぶりに再会する機会があつて、その時にピピッと来たんだよ」

「・・・芸能人にありがちな『ピピツ』か。そんなんで結婚して大丈夫なのか？」

「俺達は大丈夫」

和彦は自信満々に栄子の肩を抱いた。それがまたドラマのワンシーンのように絵になるのだから美男美女は得である。

「和彦さん、のんびりしている場合じゃありませんよ。昨日、今日とほとんど本来の仕事ができてませんから、今から早速仕事です」

山崎が淡々と言う。が、その視線は和彦の手が置かれた栄子の肩の上だ。

「へえへえ、分かってるよ。じゃあまた後でな。夜、式を挙げるホテルに行つてウエディングプランナーと段取りを話そう」

和彦はそう言うと突然、栄子の唇にチュツと音を立ててキスをした。栄子は一瞬ギョツとしたような表情をしたが、他の人たちは驚きの

あまりそれには気づかなかった。

「・・・うん、後でね」

唇が離れたあと栄子がそう言ったのを聞いて、和彦は満足そうに山崎と控え室を出て行った。

地下鉄の中、なんとなく一緒に帰る形になってしまった寿々菜と武上とそして栄子は、3人並んで椅子に座っていた。武上は本当は真ん中に座って寿々菜と栄子の接触を避けたかったが、女2人と男1人では、男はどうしてだか端っこに座ってしまう。武上のような男は余計にだ。

「あの・・・ご婚約、おめでとうございます」

寿々菜はずっと黙っているのも変だと思い、頑張って栄子に話しかけた。

「ありがとう」

栄子がバラのような笑顔で微笑む。だが、やはりどこか寂しそうな影が付き纏う。

そんな栄子の様子に、寿々菜がそれ以上何を言っているかわからなくて、今度は栄子の方が寿々菜に話しかけてきた。

「あなた、スウちゃんていう子よね？」

「え？私のこと、知ってるんですか？」

スウのことを知っているなんて、なんとも貴重な人種である。
しかし。

「ええ。和彦からよく聞いてるから」

なんだ・・・

寿々菜は少しがっかりした。

「和彦さん、私のことなんて言っていましたか？」

「おっちょこちょいで手のかかる奴だって」

「・・・」

「でも、それが和彦の愛情表現なのよ。和彦はスウちゃんのことをとても大切に思っているみたい」

「大切に思っている」。だがそれはあくまで「妹のように」だと寿々菜も分かっている。

ますます落ち込む寿々菜を見て、自分の知名度の低さに落ち込んでいると思つた栄子は励ますようにこう言つた。

「あ、だけど私、和彦にスウちゃんのこと聞く前からスウちゃんのこと知ってたわよ」

「え？」

「スウちゃん、前に『御園探偵』に出てたでしょ？とっても演技が上手だったから、印象に残ってたの」

「・・・ありがとうございます」

栄子は見た目だけでなく、中身まで「美人」だ。
寿々菜はヤキモチばかり妬いている自分を情けなく思い、なんとか
笑顔を作って栄子に向けた。

第5話 胸騒ぎ

「では、お式もご披露宴もシンプルな物でよろしいのですね？」

Tホテルのウエディングプランナー・小杉恵美は声が震えるのをなんとか堪えながらそう言った。

だが、この世界ではベテランである10年目の小杉が緊張するのも無理はない。なんといってもトップアイドルのKAZUが目の前に座っており、自分のプロデューサーで結婚式を挙げようというのだから！

小杉がKAZUの結婚式担当になったのは単なる偶然だった。

5日前、遅めの昼休みから戻ってきてブライダルサロンの中でパンフレットの整理をしていると、背の高いカップルがフラツと入ってきて「ここで結婚式を挙げたいんですが」と小杉に言ったのだ。

小杉は最初それがKAZUだと気づかなかったが――似ているなとは思ったが、まさか本当にKAZUだとは思わなかった――本人が「僕、芸能人なんですけどご迷惑にならないですかね？」と言ったのを聞いてようやく気がついた。

そしてそのまま小杉が2人にあれこれ説明したので、なんとなくそのまま小杉がKAZUの結婚式を担当することになったのだ。

小杉はいまだに信じられない気分だった。

ただ少し残念なのは、冒頭にもあったようにKAZUは質素な式を望んでいるということだ。

ホテルとしては豪華な式を挙げてもらったほうが儲かるし、ホテルの宣伝にもなる。小杉自身もそんな大きな結婚式を手がけてみたいと常々思っていた。しかし本人がそうしたくないのならば、仕方が

ない。

幸いホテルの総支配人は門野社長とは違って金の亡者ではない、お客様第一の根っからのサービスマンだ。小杉に「何が何でも豪華な式を挙げさせろ」なんてことは間違っても言わない。その点小杉は、がっかりしながらも安心して仕事を進められる。

「テレビカメラは披露宴に入れますか？」

それでも小杉は若干未練がましくそう聞いた。
が、和彦はやはり「とんでもない」と首を横に振る。

「テレビカメラなんかあったら落ち着いて披露宴を楽しめないじゃないですか。絶対に入れません。だからこじんまりした会場がいいんです」

「かしこまりました」

KAZUの意志は硬いみたいね。

小杉は今度こそ「式の拡大」を諦めて、詳細の打ち合わせに入った。

「式はチャペルで行いますか？それとも神前式でしょうか？」

「チャペルで」

「ご出席は何名様くらいですか？」

「80人くらいかな」

「お花は生花にしますか、造花にしますか？」

「生花で」

ときばきと答えるKAZU。こういう客はやりやすい。

しかし・・・

小杉は新婦である栄子（と呼ばれていることを小杉は知らないが）の方を見た。

結婚式と言えば、普通あれこれ決めたがるのは女性の方である。ところがこのKAZUカップルは男であるKAZUの方が積極的で、女である栄子の方が消極的である。

もっと正直にいうと、栄子はこの結婚に乗り気ではないように見える。そこはこの道10年のベテランの小杉が言うのだから間違いない。

KAZUなんて有名人と結婚するから気後れしてるのかしら？

気後れなんてしないでいい容姿をしてるのに。

それとも単なるマリッジブルー？

あ、まさか・・・

「あの、間違っていたら大変申し訳ないのですが」

「はい？」

「新婦様はご妊娠されていたりしますか？」

栄子が驚いた顔をし、KAZUが笑う。

「いえ、してません」

「そ、それは失礼しました」

なんだ、ツワリで気分が悪いのかと思った。

でも、それじゃあ元気なさそうに見えるのはやっぱり・・・

いや、そこを盛り立てていくのがウエディングプランナーの仕事よ。

「それでは次にドレスとお食事の打ち合わせについてですが、こちらら別途時間を取って頂いて・・・」

と、その時、ブライダルサロンの入り口に人影が見えた。

小杉はすぐにそれに気づいたが、KAZUカップルは入り口に背を向けているので気づいていない。

そこで小杉も無視しようとしたのだが・・・

「ああ、これはこれは。KAZUさんではありませんか」

背広がはちきれそうなくらい肥満体系の脂ぎった男が、人目もはばからず大きな声で近づいてきた。総務のボス・倉屋小次郎である。

ちなみにこのホテルの従業員はみんな、倉屋のことを「小次郎さん」と呼んでいる。これは別に小次郎を慕っているからでも、大きな身体にくせに「小次郎」なんてふざけた名前であることを馬鹿にしているからでもなく、実は小次郎の兄・宗太郎がこのホテルの総支配人で、2人とも苗字が同じでややこしいから、宗太郎のこと小次郎のこととも名前で呼んでいるだけなのである。

もともと「宗太郎さん」はみんな親しみを込めて呼んでいるが、「小次郎さん」には軽蔑の響きが含まれているのも事実。

というのもこの小次郎、とにかく「いけてない」人間で、ろくに仕事もせずギャンブルと女ばかりの不健康な生活を送っているのだ。「総務のボス」なんて何をやっているのかよく分からない立場も、兄の宗太郎が温情で与えてやった物である。

小杉は密かに、マスコミにKAZUの結婚をリークしたのは小次郎ではないかと睨んでいる。

何故小次郎がそんなことをするのかって？

それはもちろん、雑誌社から貰える小遣い目当てである。

「この度は当ホテルでの挙式、ありがとうございます」

この度はおめでとございます、が先でしょ！と小杉は心の中で小次郎に突っ込んだ。

「いえ、当日はよろしく願います」

しかしKAZUはそんなことは気にもせず、小次郎にも笑顔を送る。

やっぱりKAZUはテレビの外でもKAZUなんだわ。素敵。

と、武上が聞いたらひっくり返りそうなことを考える小杉。

だが今はとにかく小次郎に邪魔をして欲しくない。

小次郎がいたのでは、まとまる話もまとまらなくなる。

「小次郎さん、そう言えばさっき宗太郎さんがお探でしたよ」

口からでまかせを言ってみる。だが兄に頭の上がない小次郎は口の中で「チッ」と舌打ちすると、「では失礼します」と言ってブライダルサロンから出ていった。

小杉はホッとため息をつき、KAZUカップルに頭を下げた。

「失礼いたしました」

「いえ。宗太郎さんって誰ですか？」

「うちの総支配人です。さっきの小次郎さんの兄なんですが・・・」

兄弟なのに月とすつぽんほども違うんです」

そう言つて小杉はポツと頬を染めた。

宗太郎は今年50歳になる。しかし実年齢より遙かに老けて見える小次郎とは違つて、宗太郎は若々しくかつこいい。12年前に妻を亡くしてからずっと独身で、ホテルウーマン達の密かな憧れなのだ。

「小杉さん、その宗太郎さんという方がお好きなんですね」

不意に栄子が口を開いた。

小杉は、まさかここで栄子が話しかけてくるとは思つていなかった。ので動揺し、それで返つて思つていることが顔に出てしまった。

「そ、そんな、とんでもない……。総支配人ですよ？」

「総支配人でもなんでもいいじゃないですか」

「でも……。近くで仕事ができるだけで充分です」

小杉がそう言つと、栄子はふと表情を曇らせた。

「そう……。かもしれませぬね。好きな人の近くにいれるって、素敵なことですよ」

栄子のその言い方が妙に実感がこもっていて、小杉は胸騒ぎを覚えた。

第6話 兄弟

「先程うちの従業員が失礼なことを致したと伺いました。大変申し訳ありません」

そう言つて和彦と栄子に潔く頭を下げたのは、中肉中背のなかなか見栄えのいい男だった。

年は40半ば・・・いや、彼が小杉の言っていた総支配人の倉屋宗太郎だから、50歳か。

確かに、見える男だな。

和彦は心の中で宗太郎を値踏みしながら顔には爽やかな笑顔を作り「大丈夫ですよ」と言つてはみたものの、実はかなり怒っていた。もしここに武上がいたら、間違いなく八つ当たりしていただろう。

「しかし、小次・・・倉屋の大きな声のせいで、岩城様のことに気付かれたお客様がお連れ様にとんでもないことを」

宗太郎が申し訳なさそうに栄子を見た。

そうなのだ。小次郎のせいで和彦たちに気付いた一般客達によって、和彦はともかく栄子まで勝手に写真を撮られまくる始末。拳句、たまたま居合わせたKAZUFANが栄子に水をかけるといっておまけまでついてきた。

「少ししか濡れてませんから」

栄子もそう言ったが、実際にはかなり服が濡れてしまっていた。小杉が真っ青になって宗太郎を呼んだのは仕方のないことだ。

「お式の前ですから、お風邪を引かれては大変です。本日はお詫びも兼ねて部屋をご用意させて頂きます。お召し物はクリーニング致しますので、部屋でガウンにお着替えください」

「はあ・・・部屋ですか」

「もちろんサービスでございます。ごゆっくりご宿泊なさってください」

和彦と栄子は顔を見合わせた。サービス（つまり無料）ということに反応したのでは、無論ない。

2人が顔を見合わせた理由は「ご宿泊」の方だ。

和彦は「いや、そこまでして頂かなくても」と断ろうとしたが、濡れた栄子をそのまま家に帰すわけにもいかない。クリーニングの間だけでも部屋を借りた方がいいだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「どうぞ、こちらです」

総支配人である倉屋宗太郎自ら和彦たちを案内する。

そして和彦と栄子の後ろを小杉が歩く。

「本当に申し訳ありませんでした・・・」

小杉は意気消沈している。無理もない、自分の目の前で客が水をかけられたのだ。しかもブライダルの打ち合わせ中。結婚式をキャンセルされてもおかしくない。

だが、和彦は怒ってはいたもののそんなことはおくびにも出さず、

結婚式のキャンセルもしなかった。

「小杉さんのせいじゃありませんよ」

栄子が小杉を励ます。

「怪我をしたわけでもないし、気になさらないで下さい」

「はい・・・でも・・・」

「それより、小杉さんのおっしゃる通り、宗太郎さんは素敵な方ですね」

栄子にそう言われて、また小杉の頬が染まる。

「さっきの小次郎さんとは随分雰囲気違いますね」

「ですよね！」

思わず栄子が客だということを忘れて興奮する小杉。

宗太郎に聞こえないように栄子にこそつと話す。

「腹違いの兄弟、とかじゃないんですよ？正真正銘本物の兄弟。でも昔から宗太郎さんは何をやらせてもトップだったのに対して、小次郎さんはパツとしなかったそうです」

「あら、そうなんですか」

「今も宗太郎さんの手腕のお陰でTホテルが繁盛しているのが気に食わないらしくて・・・あの、もしかしたらなんですけど、マスコミに岩城様のご結婚のことをリークしたのも小次郎さんかもしれない」

「どうしてそんなことを？」

「余計なことをしたがるんですよ、あの人は」

小杉は当たり前のようにそう言った。

用意されたスイートルームから宗太郎と小杉が出て行くと、和彦はデんと2つ並んだ巨大なベッドに寝転んだ。栄子には、言葉は発せずとも和彦が素に戻っているのがすぐに分かる。

「結婚式の打ち合わせって疲れるなー。まあ、スイートがくつついて来たからいいけど。ラッキー」

「スイートなんて、仕事で泊まる時はいつもなんじゃないの？」

「うちのタヌキがそんな無駄遣いする訳ねーだろ」

門野社長のことである。

「でもホテル代を払うのはテレビ局とかでしょ？」

「タヌキは『普通の部屋でいいから、浮いた金はギャンブルに入れる』つつつて、ギャンブルが増えた分は自分の懐に入れるんだよ」

「本当にケチなのね、あのオッサン」

・・・おや。

どうやら仮面を被っていたのは和彦だけではないようである。

和彦が寝転がったまま「うーっん」と背伸びをした。

「それはそうと、やっぱりアイツは使えるな。俺の目に狂いはなかった」

「ほんと、さすが和彦ね。変なところで鼻が利く」

「うっさい。アイツを利用することを思いついたのはお前だろ」

「そうだったかしら？」

栄子が濡れたカーディガンを脱ぎながら涼しい顔をする。
やはりこの女、どうも一癖あるらしい。

「ちょっと。何じつと見てるのよ。あっち向いてて」

「いいじゃん、婚約者なんだから」

ニヤニヤしながら栄子の着替えを見ている和彦に、栄子は脱いだカーディガンをバサツと投げつけ、ガウンを抱えてシャワールームに駆け込んでいった。

和彦はそんな栄子を見て、珍しく素で笑うと、ナイトテーブルの上に置かれた新聞を読み始めた。

そしてちょうど1面記事を読み終えた時、部屋の中に「ジリリリ」と控えめなベルの音が鳴り響いた。

ドアベルだ。誰かが来たらしい。

和彦が新聞を片手にドアを開くと、英兵を思わせる制服に身を包んだ若いベルボーイが1人、廊下に立っていた。

「失礼致します。濡れたお召し物を預かりに参りました」

若いやさすがに一流ホテルのベルボーイだけあって礼儀正しい。
ところが。

「ああ、ちょっと待って下さい。今着替えて・・・って、あいつ、遅いな。何やってるんだ」

和彦は無意識にシャワールームの方を見た。その扉はしっかり閉まっ
つていて（和彦が推測するに、鍵もかけられている）まだ開きそう
にない。

「すみません。まだ、」

和彦がベルボーイの方に向き直ると・・・ベルボーイは何やら思いつめた様子で栄子が入っているシャワールームの方を見つめている。

「あの！」

わざと大きな声で呼びかけやると、ベルボーイがハッと我に返って姿勢を正す。

「し、失礼しました！」

「・・・」

・・・なんだ、コイツ。

なんとなく面白くない。

和彦はチラリとベルボーイを睨んだ後、大股でシャワールームに向かい、ドアをノックした。

「おい。ベルボーイが濡れた服取りにきたぞ」

「あ、うん。今出る」

ドアが内側から開き、柔らかそうな白いガウンに身を包んだ栄子が濡れた髪をバスタオルで拭きながら現れた。身体からはホコホコと湯気が立ち上がっていて、まるで映画で見る女優の風呂上りシーンのようだ。栄子をよく見慣れた和彦でも、思わず見とれてしまう。

・・・あ。まさかあいつ、また。

振り返ってベルボーイの方を見ると、案の定ベルボーイもポカーンと栄子に見とれている。

「ごめん、ごめん。ついでにシャワー浴びてたの。気持ちよかったわよ？和彦も後で入ったら？」

そう言いながら栄子は濡れた服を手に、ベルボーイに近づいた。ベルボーイが緊張しているのを知ってか知らずか、自分のガウン姿を恥らう様子は全くない。

「この服、よろしく。水で濡れてるだけだから、乾かすだけでいいわ」

「はははい。確かに受けたたままりました」

転がるようにして部屋を出て行くベルボーイを見て、栄子が楽しげに笑う。

「かわいい子ね」

「おい・・・からかうのもいい加減にしろよ」

「あら、もしかして妬いてるの？」

「まさか」

和彦が再びベッドに座って新聞を広げると、栄子は少し真面目な表情で和彦の隣に腰を下ろした。

「本当に泊まってく？」

「どっちでも」

「・・・ねえ、後悔してない？」

「何を？」

「この結婚」

和彦が新聞から顔を上げる。

「何を今更。第一この結婚を言い出したのは俺の方だぞ？」

「そうだけど・・・。ほら、ファンの人達はショック受けてるじゃない。スウちゃんっていう子も、和彦のこと好きみたいだし」

「そんなの仕方ないだろ。ファン全員と結婚なんてできない」

「人気者のお決まりの台詞ね」

栄子は笑って立ち上がると、ガウンの紐を解いた。

第7話 試着

「申し訳ありませんが、こちらは内科です。心療科は3階になります」

看護婦に素っ気無くそう言われて寿々菜は鼻をすすった。

「私もう生きていけません！」

「先生、精神科に行つて頂きましょうか？」

「そうだね」

「そんなあゝ!!!」

「次の方、どうぞ」

看護婦は診察室の扉を開いて寿々菜に言った。

「お帰りはこちらです」

「ひどいー」

・・・そう、ここは言うまでもなく病院である。

ただ、寿々菜はどこが悪いわけではなく（敢えて言うなら頭が悪い）

、ひよんなことから知り合つたここに勤めるエリート医師・坂井と

看護婦の高井戸薫たかいどかあるに「お悩み相談」に来たのである。

全くもって迷惑な話だ。

KAZUFANの坂井さんと薫さんなら、私の気持ちを分かってくれると思つたのに！

ところが坂井は、

「まあファンと言っても僕は男だからね。KAZUが誰と結婚しようとなんかどうでもいいよ。僕はKAZUがドラマに出てればいいんだ」

という次第。一方、KAZUの為に脱・地味女を果たした薫は、

「そりゃあショックよ。でも私は本当にKAZUさんを好きだから、KAZUさんが幸せなら温かく見守るわ」

と、優等生なご回答。

薫さんてば前に、「KAZUさんの一ファンであることをやめたんです」とか言ってたくせに・・・

温かく見守るなんて絶対嘘よ。

薫さんみたいな人に限って、栄子さんにこっそり毒を注射したりするんだから。

和彦の結婚のせいで、若干荒れ気味の寿々菜である。

「でも！これはショックですよね！」

寿々菜はさつき駅で買ってきた週刊誌を薫に突きつけた。

そこには「KAZU 噂の婚約者と挙式を行うホテルに婚前お泊り！」という文字と共に、2人が朝日の中（に寿々菜には見える）並んでホテルから出てきている写真が掲載されている。

「これが何か？」

薫はじーっとそれを見た後、首を傾げた。

「結婚前なのに、こんなこといけませんよね！」

「・・・」

「ね！」

「おこちゃま」

「！！！」

「さ、お譲ちゃん、小児科は2階ですからね。1人で行けるかな？」
「行けます！」

おいおい、行くのか。

こうして寿々菜は戦友を得ることなく、病院を後にしたのだった。

その頃、「噂の婚約者」である栄子は1人でTホテルを訪れていた。ここで結婚式の打ち合わせをする時は必ず和彦と一緒にだったが、今日はウエディングドレスの試着だけだし和彦もそうそう仕事を休めないという訳で、今日は1人である。

とうとうここまで来ちゃったな・・・

ズラリと並べられた純白のドレスを前に栄子は小さくため息をついた。

「どちらからご試着なさいますか？」

小杉が分厚いカタログを栄子の前に広げた。ハンガーに掛けられているドレスを見るより、カタログの中でモデルが着ているドレスを見る方がイメージが沸きやすいとかで、まずはカタログを見て試着

するドレスを決めるらしい。

「オーソドックスなA型もよろしいかと思いますが、新婦様は背が高くスタイルも良ろしいのでマーメイド型もお似合いだと思います」

「はあ・・・」

小杉お勧めのタイトなマーメイド型ドレスを着ている自分と、その右隣でタキシードを着ている和彦を想像してみる。
確かに似合いだ。それこそまるでカタログから抜け出てきたように。

でも・・・

「こっちを着てみます」

栄子を選んだのは、腰から下が大きく広がったA型のウェディングドレスだった。大人っぽい栄子が着るには少々可愛らしすぎる、と小杉は思ったが、そこは客の好みだ。小杉は笑顔で「かしこまりました」と言つて、栄子が所望したドレスをハンガーから取ってきた。

「こちらのフィッティングルームをお使い下さい」

そう言つて小杉がカーテンを引いた奥には、フィッティングルームと呼ぶには広すぎる空間が広がっていた。奥の壁に取り付けられている鏡も、普通の大きさではない。

「うわあ、広い」

栄子が思わず感嘆の声を上げる。

「ウエディングドレスはかさ張りますから着替えるにはこれくらいの広さが必要なんです。上の階にこちらと似たタイプのドレスのご用意もありますので、取って参ります。お1人でお着替えになれますか？」

「あ、はい」

正直、ボリウムたつぷりのドレスを1人で着る自信などないのだが、いい大人が着替えを手伝ってもらうというのも気が引ける。栄子は何とかなるだろうと思い、1人で着替えることにした。

カーテンを閉じスカートのホックを外していると、カーテンの向こうから小杉の声が聞こえてきた。

「ヒールも持つてまいります。サイズはおいくつですか？」

「24センチです」

「ヒールの高さはどういたしましょう？岩城様は背がお高いので、何センチの物を履いても岩城様より高くなることはないと思います」

「えっと・・・いえ、あまり高くない物でお願いします」

「かしこまりました」

そこで小杉の声は途切れ、足音が遠ざかって行った。部屋から出て行ったらしい。

栄子はまたため息をつく、大きな鏡に映った自分の姿を見つめた。

一方小杉は栄子と話している時、フィッティングルームの前に綺麗に並べられた栄子の靴を見ていた。ヒールの高い靴だ。

小杉は、ヒールは背の高い女性が履いてこそ美しいと思っている。

栄子もそう思っているかどうかは分からないが、ヒールが嫌いではないらしい。

ウエディングドレスを着ると足元は見えないけど、ヒールの高い靴を履いた方が足がより長く見えていいのに・・・

小杉は釈然としないまま、部屋を後にした。

そして小杉がエレベーターの中に消えるのを待っていたかのように、1つの人影が部屋の中に滑り込んでいったのだった。

「おめでとう、結婚するらしいじゃない」

嫌味たつぷりに和彦に話しかけてきたのは、年齢不詳の女プロデューサー・Kである。

名前はまだない。

・・・じゃなくて、和彦は名前を思い出せなかった。が、顔を合わせる度に口説かれていたので好きな人間ではないということは覚えている。

和彦は「ええ、まあ」と生返事をした。

「お相手はどんな方？」

「一般ですよ」

「それは知ってるけど。業界人でもないの？仕事は？」

しつこいなー。うぜー。

和彦は台本を読む振りをして顔を伏せた。

今日は単発ドラマの撮影の為に東京を遠く離れた山奥に来ている。この仕事はだいぶ以前から決まっていたのでKはここでまた和彦を口説くつもりだったのだろうが、先日の和彦の結婚報道のお陰であり機嫌が良くないらしい。

和彦もプロデューサーを怒らせるのは得策でない事くらいは分かっているので、イライラしながらもなんとか笑顔で顔を上げた。

「業界人じゃないですけど、出版社に勤めています」

「へえ」。その関係で知り合ったの？」

てめーに関係ないだろ!!!

「いえ、昔からの知り合いなんです。再会したのは仕事の関係ですけど」

「へえ」

和彦は、早く休憩が終わって撮影が再開してくれないかな、などと今まで思ったこともないようなことを思った。

いつそ早く結婚しまえば、こいつにこんなネチネチ言われなくて済むのかもな。

・・・いや、それじゃこの結婚の意味がないか。

和彦がうんざりしながらKの嫌味を右から左に聞き流していると、和彦の携帯が鳴った。電話だ。和彦は渡りに船とばかりに携帯に出た。今なら武上からの電話でも、優しく応対できそうな気がする。

ところが。

和彦の耳に飛び込んできたのはとんでもない言葉だった。

第8話 消えた栄子

「武上！」

小杉から電話を受けた和彦がTホテルの一室に駆けつけた時、既にそこは警官と鑑識で溢れ返っていた。その中には武上の姿もある。

殺人事件担当である捜査一課の武上がここにいるということは・・・

和彦は武上の胸倉を掴む勢いで、武上に駆け寄った。

「なんだよ、これ！あいつは！？」

「落ち着け、和彦」

「これが落ち着いてられるかよ！！！」

和彦はそう怒鳴って部屋の中を指差した。

そこはブライダルサロンの隣にある、ウエディングドレスが展示されている部屋・・・の奥のフィッティングルームだった。

床も天井も血だらけだ。扉の向いにある大きな鏡には血の滝が流れ、壁に掛けられたウエディングドレスは真紅に染まっている。

1時間前、栄子が試着していたウエディングドレスだ。

武上は、今まで色々な事件に遭遇してきた和彦にだからこそ、ビジネスライクに事実だけを伝えた。

「ブライダル担当の小杉さんが見つけた時、部屋は既にこの状態だった。栄子さんはまだ見つかっていない」

「・・・え？」

和彦が啞然とする。

なんだかんだ和彦と付き合ってきた武上には、和彦が心の底から驚いているのがよく分かった。

「最初からこの状態だった？」

「そうだ。栄子さんの姿もなかった」

「・・・」

和彦はフィッティングルームの中をゆつくりと見回した。通常のフィッティングルームより広いと言ってもせいぜい4畳半くらいの大きさだ。すぐに全てを見て取れる。

「・・・ここで刺されたのか？」

「和彦・・・」

「あいつはここで刺されてどこかに連れて行かれたのか？」

「・・・」

今のところはそうとしか考えられない。しかもこの大量の血だ、とてもじゃないが生きてはいまい。和彦といつもいがみ合っている武上だが、さすがに今回ばかりは言葉に詰まった。

すると、武上の後ろから目に涙をいっぱい溜めた小杉が震えながら現れた。

「岩城様・・・大変申し訳ありません。私がここを離れた15分ほどの間にこんなことに・・・お詫びのしようもありません」

和彦は無言で小杉を見た。

KAZUモードの和彦なら「小杉さんの責任じゃありませんよ」と言うだろうし、素の和彦なら「てめー、何やってたんだよ！」と言

うだろう。

しかし和彦は何も言わなかった。ただ黙って小杉を見た後、視線を再び血まみれのフィッティングルームに向けた。

小杉はそれ以上言葉が出てこず、その場で俯くことしかできない。

と、また武上の後ろから女性の声がした。ただし今度は和彦のよく知っている声だ。

「和彦さん」

「・・・寿々菜？」

見ると、武上の後ろにある扉から、制服姿の寿々菜がおずおずと顔を出しているではないか。

「何やってんだよ。学校は？」

「もう終わりました。家に帰ってる途中に武上さんから電話を貰って・・・ここに来て欲しいって」

和彦は、武上が寿々菜に小さく頷き鑑識達の方へ歩いて行くのを見て、再び驚いた。

どうやら武上は和彦がショックを受けるのを見越して、和彦を慰めるために寿々菜をここに呼んだらしい。武上に見れば大サービスと言ったところか。もともと寿々菜は自分の役割を余りよく分かっているようではあるが。

「あいつ、余計なことを・・・」

「え？」

「いや、なんでもない」

和彦は息をついて廊下に出ると、壁にもたれた。寿々菜がちょこち

よことその後をついてくる。

「たく、こんな時に寿々菜を呼んだからって、なんだって言うんだ。

しかし和彦は、最初にフィッティングルームの中を見た時よりも自分がだいぶ冷静になっているのに気が付いていた。悔しいが武上の目論見は正しかったらしい。

和彦はいつもの調子で廊下から部屋の中の鑑識の様子を観察した。

「和彦さん・・・大丈夫ですか？」

しかし寿々菜の方が冷静ではなく、目を真っ赤にして和彦に訊ねてくる。

「ああ。大丈夫になったよ、お陰様でな」

「え？」

「それよりなんで寿々菜が泣くんだ？お前は俺のファンだろ？俺の婚約者なんかいなくなった方がいいんじゃないのか？」

「そ、そんなこと！」

寿々菜はいきり立ってから、ぷしゅーっと音を立てそうな勢いでしばんだ。

「あの・・・はい、正直そう思っていました。でもまさか、本当にこんなことになるなんて・・・ごめんなさい、和彦さん」

「何が？」

「きつと私がそんな風に思ってたから、本当になっちゃったんです」

「まさか」

和彦は鼻で笑った。だがさすがにそれはいつものようなニヒルな物にはならなかった。実際に栄子がいなくなってしまったのだ、当然だろう。

2人はそれからしばらく黙って部屋の中を見ていた。武上ら刑事や鑑識達が事務的に作業を進めていく。

寿々菜は何とも言えない気持ちで血まみれのフィッティングルームの中を見回した。そしてその目は壁で止まった。

あ、ウエディングドレス・・・綺麗だな。栄子さん、あれを結婚式で着るつもりだったのかな。

だがおそらくそれはもう叶わないだろう。寿々菜は栄子に嫉妬していた自分を改めて悔いた。和彦が結婚してしまうのは辛い、和彦が悲しんでいるのを見るのはもっと辛い。高井戸薫が言っていた「私は本当にKAZUさんを好きだから、KAZUさんが幸せなら温かく見守るわ」という言葉が思い出された。今なら、薫こそが本当のKAZUファンなのだと認められる。

それに引き換え私は・・・

寿々菜は本当に自分のせいでこんな事件が起きてしまったような気がしてきた。

そして、自分がこの事件を解決しなくてはならないような気もして

きた。

そつよ！私の不純な嫉妬のせいでこの事件が起きたのなら、私が解決しなくっちゃ！

そんなワケない。が、そこは単純な寿々菜、一度こうと決めたら俄然やる気が出てきた。今度は「何か犯人に繋がるモノはないか」という目でフィッティングルームの中をしてみる。

鑑識たちが、栄子が刺されたと思われるフィッティングルームの中心を丹念に調べ、武上はウエディングドレスを気にしている。

しかし寿々菜が気になったのは・・・

来た。

寿々菜はフィッティングルームの中にある大きな鏡を見て奇妙な違和感を感じた。その鏡も例に漏れず血がべつとりと付いているのだ・・・。

「和彦さん」

「ん？・・・おい、まさか」

和彦が寿々菜の両肩を掴んだ。さすがに和彦も今回はかりは真剣だ。

「違和感、来たのか？」

「はい」

「よし、なんだ？言ってみろ」

残念なことに、寿々菜には違和感の正体を突き止めるほどの観察力・推理力はない。そこは和彦の領分だ。

「鏡です」

「鏡？あのデカイ鏡か？」

「はい。なんだろ・・・あの鏡の血が気になります」

「・・・鏡の血か・・・」

和彦が腕を組み鏡をじっと睨んだその時、廊下が急に騒がしくなった。どうやら親分のお出ましらしい。

和彦は壁から背を浮かせた。

「岩城様」

倉屋兄弟の兄でありTホテルの総支配人である倉屋宗太郎が厳しい表情で和彦に近づいてきた。その後ろから若干のんびりとやってきたのは弟の小次郎だ。2人並んでいるところを見るとますます兄弟には見えない。

「遅くなり、申し訳ありません。この度のことは全てこちらの責任でございます。本当に申し訳ありませんでした」

宗太郎に続き、小次郎も頭を下げる。しかしその深さには随分差があり、小次郎は頭を上げるついでにフィッティングルームの中を見る余裕もあつた。

「あれ？死体は？」

「小次郎！」

宗太郎が慌てて小次郎の脇をつつく。

「失礼なことを言うんじゃない！」

「え？あ、失礼しました・・・？」

小次郎は兄にせかされて頭をかきながら、もう一度お辞儀をした。この状況でこんな発言ができるとは、この小次郎、やはりどこかピントがずれているらしい。和彦も寿々菜も怒るのを通り越して呆れてしまった。

「死体なんかありませんよ。まだ見つかってません」

和彦は、何で俺がこんな説明しなきゃいけないーんだ、と思いながらも、一応親切に小次郎に説明してやった。そうでないと、この男はまたとんでもないことを言い出しそうだ。そうなったら和彦も自分を抑える自信がない。

小次郎が驚いた顔をする。

「え？」

「僕の婚約者は行方不明です」

「え？・・・え？そうなんですか？」

「お聞きになってなかったんですか？」

「え、いや、その、詳しくは・・・そうなんですか・・・えっと・・・」

小次郎の目が泳いだ。どうやらようやく状況を理解したようだ。

しかし寿々菜はそんな小次郎を見て、二度目の違和感を覚えていた。

第9話 血と鏡

鑑識が作業を終え、部屋に「KEEP OUT」のテープが張り巡らされてようやくこの「騒然」は一段落した。しかし渦中の和彦の心が本当の意味で一段落することはなかった。

それでもいつも通り勝手に現場を歩き回ってみる。

「あの・・・岩城様」

振り向くと、倉屋宗太郎と小杉が並んで立っていた。倉屋小次郎は凄惨な現場に腰を抜かしたのか、さっさとどこかへ退散していつてしまった。

「この度は本当に申し訳ありません」

2人して改めて頭を下げる。話しているのはもちろん宗太郎の方だ。小杉はまだ涙が乾いていない。

和彦は今度は控えめなKAZUSMILEを作って肩をすくめた。

「こちらのホテルの手落ちだとは思ってませんから。むしろ犯人は、結婚に嫉妬した僕のファンかもしれません。もしそうなら、逆に僕がこちらにご迷惑をかけたことになります。こちらこそすみませんでした」

「とんでもありません。仮に岩城様のファンの方のした事だとしても、我々にはそれを防ぐ義務があります。このホテル内で起きた事件・事故の責任は全て我々にあります」

ここまではつきりと言い切る責任者も珍しい。和彦は、そして部屋

を観察するためというより勝手に動き回る和彦を監視するために残った武上は、宗太郎に感心した。

「いえ、我々ではありません。私の責任です」

小杉がようやく喉を詰まらせながら口を開いた。その目は真っ直ぐ和彦を見ている。

「一生に一度のおめでたい事のお手伝いをさせて頂いているウエディングプランナーの私が、お式を台無しにしてしまうようなことをしてしまい、申し訳ありません」

もう一度頭を下げた小杉の背中に宗太郎が手を置く。

「岩城様、小杉の責任ではありません。ここの責任者は私ですから私の責任です。申し訳ありません」

「宗太郎さん・・・」

小杉が涙目で宗太郎を見上げた。

そう言や小杉は宗太郎に惚れてるんだっとな。

和彦は咳払いをした。

「もう『申し訳ありません』は結構ですから。それより、もう少しホテルの中や外を見て回ってもいいですか？」

「もちろんです。お気がお済みになるまでどこを見て頂いても結構です」

「じゃあ遠慮なく」

和彦は宗太郎と小杉が部屋を出て行くのを見送ると、まだ血で湿ったフイッティングルームにかがみこんだ。寿々菜もその隣に尻を浮かせて座る。

武上も含めて3人とも靴を履いていて、その上からビニール製の靴カバーをつけているが、その全てを通り抜けて血の生暖かさが伝わってくるような気がした。

「さっきのお2人、良い方達ですね」

「だろ？だからこのホテルで結婚式をしようと思ったんだ・・・ってあいつが決めたんだけど」

「そうなんですか・・・」

寿々菜は胸苦しさを覚えた。

和彦と栄子は2人でどんな時間を重ねてきたのだろう。そしてこれから先、再び2人の時間が重なることはあるのだろうか。

「和彦さ、」

「さっき寿々菜が違和感を感じるって言ってたのは、この鏡だよな？」

和彦が寿々菜の言葉を遮って顔を上げ、鏡を見た。そこには血がべつとりとついたままになっている。

「あ、はい」

「本当ですか、寿々菜さん？」

これには武上も食いついた。寿々菜の「違和感」は証拠にはならないが、いつも事件解決の糸口に繋がるのだ。

「はい。でも、やっぱりどうして違和感があるのかは分からないんですけど」

「充分ですよ」

武上も鏡に近づいた。大きいということと、血が流れるように付いているということ以外、特に変わったところはないように思える。

寿々菜は栄子になったつもりで鏡の前に立った。

「栄子さんはここでウエディングドレスを試着してたんですよね？」

「ああ。でも小杉の話によると、フィッティングルームに持ち込んだドレスはその壁に掛けてあるやつだけらしいから、まだ試着はしてなかったんだろうな。もしくは、試着を終えた後だったか」

「試着はまだだったと思います」

「どうして？」

「え、だってこんな綺麗なドレス、一回着たらなかなか脱ぎたくなくなっちゃうじゃないですか。きつと何分間も着たまま鏡で自分の姿を見てると思います。小杉さんが15分ほどで戻ってきたということを見ると、着る前だったんじゃないでしょうか」

「ふーん。そんなもんかね」

仕事で常に「早着替え」を強いられている和彦にその気持ちは分からない。ついでに普通の男である武上にも分からないのが、「寿々菜さんがそう言うのなら、きっとそうなのだろう」となるとも刑事らしくないことを考えた。

「でも確かに、1人でこのドレスを試着しようと思っただけで脱ぐだけでも時間がかかるでしょうから、寿々菜さんの言う通り着る前だったんでしょうね」

「わかんねーぞ。ドレス姿のところを刺されたのかもしれない」
「それで犯人がドレスを脱がせて壁に掛けたのか？そんなことはないだろ。もし栄子さんを連れ去るのにドレスが邪魔なら脱がせて床に放っておくはずだ。それにドレスは血で汚れてるが、破れてはいない」

武上は言ってしまったてから和彦の様子が気になったが、和彦は無理をしているのか表情を動かさない。

「つーことは、小杉が出て行つてすぐに犯人はここに入ってきたってことか」

「・・・そういうことになるだろうな」

寿々菜は2人のやり取りを聞いた後、気を取り直して再び想像を始めた。

「ドレスに着替えようと思ってここに立つて鏡を見る・・・栄子さんは犯人を見たんでしょうか？」

「フィッティングルームの扉は鏡とは反対側にあるから、犯人が入ってきた時に鏡に映った犯人を見たかもしれないな」

「着替えようとしたら扉が開いて、誰かが入ってきたのが鏡に映る・・・」

寿々菜はパツと後ろを振り返った。

「当然、栄子さんはこうやって振り返りますよね」
「だろうな」

「いや、振り返るとは限りませんよ」

武上が補足する。

「フィッティングルームに入ってきてても不思議じゃない人物だとしたら、栄子さんは鏡の方を向いたままかもしれません」

「振り返ったとしたら胸を、振り返らなかったとしたら背中を刺した、ってことだな」

「まあ・・・そう、かもな」

武上は言葉を濁したが、和彦は何か思うところがあるらしく、寿々菜の横に立った。

「どちらにしろ、犯人は扉を開いてフィッティングルームに入った。鏡は扉の真向かいにある」

「・・・そうか。そして栄子さんは犯人と鏡の間に立っていた。犯人が栄子さんを刺しても、鏡に血は付かないはずだ」

「え、でも」

寿々菜は鏡を指差した。

「血が飛び散って付くことはあるんじゃないですか？」

「鏡に付いてる血の量を見ている。飛び散ったなんてレベルじゃないだろ」

「じゃあ・・・刺された栄子さんがよろけて鏡にぶつかって、その時血が付いたとか・・・」

「それなら、鏡に付いた血の跡は擦れたようになってるはずですよ。当然その後栄子さんは床に崩れたでしょうからね。だけどこの血の跡はどちらでもない。まるで・・・」

「まるで？」

武上は一呼吸置いて寿々菜と和彦を見て言った。

「まるで、バケツで血をかけたみたいだ」

寿々菜は背中に寒いものが走ったような気がして、身震いをした。

第10話 ドッグ

「はあ!？」

衝撃の事件から3時間後、和彦が素つ頓狂な声を上げたのは警視庁内の一室だった。ちなみに一緒に部屋にいるのは寿々菜と遅れてやってきたマネージャーの山崎、それに和彦に素つ頓狂な声を出させた張本人である武上だ。

「だから。あの血は人間の物じゃない。犬だ」

「犬・・・」

啞然として立ち尽くしている和彦に代わり、再度寿々菜が訊ねる。

「犬ってあの犬ですか？ドッグ？」

「ドッグです」

・・・再度訊ねている意味が全くないが、そこは寿々菜に甘い武上だ、優しく頷いてやる。

そして今度こそ和彦に代わって山崎が重要なことを訊ねた。

「つまりあの血は栄子さんの物じゃないんですね？栄子さんは無事ということでしょうか？」

「それはまだなんとも。行方不明に代わりはありませんから。ただ、こうなると和彦のファンの悪戯の可能性が高くなってきましたので、一時的に軟禁されてもそこまで酷いことはされないでしょう」

「そうですか・・・よかった」

武上の言葉を聞いて寿々菜は胸を撫で下ろした。しかし和彦はそう

単純ではない。しかも今回は和彦も被害者だ、どうしても想像は悪い方へ広がる。

「悪戯だとしても、俺達が結婚式を挙げるホテルで犬を殺して血を撒き散らしてるんだぞ？そんなことする奴がどうして酷いことをしないなんて言える？」

「それは・・・」

武上は詰まった。もちろんそれは武上也分かっている。いや、武上たち警察の方がよく分かっている。あの血が栄子の物だと思っていた時は、警察の中に「この出血じゃもう生きていないだろう」という雰囲気が漂っていたが、生きているかもしれないとなると一刻を争う。実は武上以外の警官は既にほとんど出払っており、栄子の大規模な搜索が始まっていた。

今は和彦には警察を信じて待っていてもらう他ない。

てゆうか、ここで大人しくしてくれ。和彦が勝手に動くと余計にややこしくなる。

「大丈夫だ。警察に任せろ」

「任せられるかよ」

「この捜査網の中でKAZUの婚約者が殺されるようなことがあってみろ、警察はいい晒し者だ。警察の威信にかけても無事に取り戻す」

「俺のファンには感謝されるかもしれねーけどな」

「お前な・・・」

武上はため息をついた。だがこれくらいの軽口を叩けるなら和彦もだいぶ余裕があるという証拠だ。

・・・これはますます大人しくしておいてもらわなくてはならない。

「和彦はここにいろ。もし栄子さんを見つけたらここに連れて来るから」

「でも、」

「いいから！それより携帯はどうだ？繋がらないか？」

「何度もかけてるよ」

和彦が携帯をポケットから取り出し武上に見せた。

「電源が切られてて繋がらない」

電源が入っていれば携帯は電波を発する。その電波を辿れば、大体の所在を掴めるのだが・・・

犯人もそんなことはお見通しして訳か。

これはなかなかツワモノかもしれないな。

武上は和彦に気付かれないよう小さく舌打ちをした。

「和彦が最後に栄子さんと話したのは？」

「えっと、いつだったかな」

和彦が携帯の発信記録と着信記録をチェックする。

「ああ、そうだ。ウエディングドレスの試着の直前に電話があった」

「それは事件直前ってことか？」

「たぶんな」

「内容は？」

「別に。これから試着だとか、楽しみだとか、どんなドレスがいいと思う？だとか・・・そんな他愛のない事だよ」

「何か不審な点は？誰かにつけられてるみたいだとか言っただけでなかったか？」

「まさか」

「そうか・・・」

なかなかテレビドラマのように手がかりがポンポン出てきたりはない。だが取り敢えず栄子が生きている可能性が出てきただけでもラッキーだ。

「分かった。とにかく今は栄子さんの搜索が第一だ。和彦はここにいろ。山崎さんは・・・」

「僕は失礼させて頂きます。和彦さんの仕事の調整が必要ですし、今後のことを社長とも話さないといけませんので」

「分かりました。寿々菜さんはどうしますか？」

武上は寿々菜を見た。武上としては和彦と寿々菜を2人きりにしたくはないが、今は状況が状況だ。寿々菜を呼んだのは武上自身でもある。

「私は和彦さんとここにいます」

「ではお願いします」

「あの・・・ちょっといいですか？」

寿々菜が言いながら自分で首を傾げる。

「どうしましたか？あ、もしかしてまた違和感ですか！？」
「はい」

武上は身を乗り出した。

「ホテルの従業員の太ったおじさん・・・みんなが『小次郎』って呼んでた人です」

「小次郎がどうかしたのか？」

和彦が訊ねる。

「なんか変でした」

「そう言えば、平気な顔して『死体は？』とか言っていましたね」

武上也寿々菜に同意する。だが和彦は首を横に振った。

「あのおっさんは、元々変なんだよ。あんな神経の図太い奴に違和感感じてたらきりがないぞ」

「そうなんですか・・・。でも、栄子さんが行方不明だつて聞いた時の小次郎さんの反応がなんか・・・図太い割にはビックリし過ぎていた気がします」

「・・・ふーん、言われてみればそうかもな。単に事の大さに驚いただけなのかもしれないけど」

「はい。あ、後、宗太郎さんって人も気になりました」

「え？」

こちらは和彦も武上也ノーマークだったので純粹に驚く。宗太郎に特におかしなところはなかったように思うのだが・・・

「怒っていました」

和彦と武上がガクツと肩を落とす。

「当たり前だろ。自分のホテルで殺人騒ぎがあったんだぞ？しかも弟は遠慮の欠片もない発言をするし、怒って当然だ」

「で、でも、なんだか駆けつけた時から怒ってるみたいでした。小次郎さんのことで怒るのは分かるんですけど・・・あの宗太郎さんて人なら、事件が起きたこと自体には怒りなさそうな気がするんです。だって事件はあの場にいた誰のせいでもないんですから」
「・・・」

和彦は腕を組んだ。

言われてみれば確かに宗太郎は現場に駆けつけた時から怒っていたような気がしなくもない。あの時点で宗太郎が怒るとすれば、栄子を1人残した小杉に対してだろうが、小杉に怒っている様子はなかった。むしろ、宗太郎は落ち込む小杉を励ましていたくらいだ。

小杉以外に怒るとすれば、犯人をホテルに入れてしまった警備員に對してだろうか？

それともリアルに犯人に対して怒っていたのだろうか？

・・・寿々菜の言う通り、宗太郎の人柄を考えるとどっちも違う気がするな。

すると山崎が思い立ったように武上に訊ねた。

「ところで犬は？」

「犬？」

「血が犬の物なら、殺された犬がいるはずです」

「それもまだ見つかっていません。そもそも犬が殺されたのがフィッティングルーム内だと断定もできていません。どこか遠くで殺されて、犯人が血だけホテルに持ち込んだ可能性もあります」

寿々菜は顔をしかめた。先ほど武上が言っていた「まるで、バケツで血をかけたみたいだ」という言葉を思い出したのだ。

犯人は意図的にフィッティングルーム内に血をばら撒いたのだろう。

ひどい・・・

「なんて酷いことを」

寿々菜の気持ちを代弁したのは意外なことに犬猿の仲である山崎だった。しかも山崎の口調にははつきり怒気が含まれているのが分かる。

「法律上は犬は『物』ですが、人間と同じ命ある生き物です。それを殺して血を利用するなんて・・・万死に値します」

「山崎さん・・・犬がお好きなんですか？」

寿々菜が訊ねると山崎は大きく頷いた。

「5匹飼っています。もうすぐ6匹目が生まれるところです」

「そ、そうですか」

「武上さん！フィッティングルームから犬の毛は発見されましたか？」

「毛、ですか？」

いつになく強い山崎に武上も一歩退く。

「この時期、犬は毛が抜けやすいんです。うちの中もそれで大変で、毎日ブラッシングを・・・ってそんなことはいいんですが、フィッティングルームの中で犬を殺したりなんかしたら、絶対に毛が飛び散ってるはずですよ」

「分かりました。鑑識に確認しておきます」

「絶対に犯人を捕まえてください。法律が許しても私が許しませんので」

「は、はい」

寿々菜・和彦・武上は、鼻息荒く部屋を出て行く山崎を呆然と眺めていたのだった・・・。

第11話 仮説

武上が警視庁内の待合室にいる和彦のところに戻ってきたのは、ちょうど和彦が待合室の外の廊下に設置されてある、今となっては化石のような公衆電話を切った時だった。

武上は首を傾げた。

「なんでそんな物、使ってるんだ？」

「あいつに携帯で電話かけまくってたら、こっちの電源が切れちゃった。だから公衆電話で事務所に連絡入れてたんだ。それよりなんか分かったか？」

「分かったような、分からないような、だ」

「は？」

和彦は武上に促されて部屋の中に戻った。部屋では寿々菜が悲壮な面持ちで・・・眠っていた。

「寿々菜さん」

「・・・あ・・・あゝあ・・・あ。お疲れ様です、武上さん」

寿々菜は大欠伸をした。なんとも色気のないヒロインである。

「いえ、鑑識に行ってきただけですから。今から栄子さんを探しに行きますが、その前に山崎さんが言っていた犬の毛の件をお伝えしようと思って」

「どうだった？」

直接栄子へ繋がる手がかりではないかもしれないが、やはり気にな

るのか和彦は真剣な表情だ。

「それがよく分からないんだ。確かにフィッティングルームから犬の毛は発見された。まだ種類は特定できていないが、長い毛だ。でもその量が微妙なところで・・・外で殺して血だけ持ち込んだとしたら、血に毛が多少混じることはあるだろうけど、発見された毛はそんな少ない量じゃないんだ。でも、フィッティングルームで殺したとしたら、もっと毛が大量に見つかるはずだ。もちろん薬が何かで眠らせて連れ込んでるだろうから、暴れて毛が飛び散ることはないだろうが、それにしても少ない」

「つまり、外で殺されたとしても中で殺されたとしても、説明のつかない中途半端な量ってことか」

「いや、1つだけ納得のいく仮説はある」

「え？」

寿々菜は目を擦った。

「なんなんですか、その仮説って」

「外で切り裂いた犬をフィッティングルームに持ち込んで、血をばら撒いた、という仮説です」

一気に目の覚める仮説だ。寿々菜はその場面を想像して気分が悪くなってきた。

「ただこの仮説には1つ筋の通らないところがあります」

「何故犯人は犬の死体を持ち帰ったか、ってことだな？」

武上は和彦に頷いて見せた。

「わざわざ血だけでなく死体ごとホテルに持ち込んでおきながら、

死体を持ち帰っている。そんなことをする理由が分からない。犬の死体が犯人に繋がるのなら、最初から血だけ持ち込めばいいはずだし、そっちの方がずっと楽だ。水筒が何かに入れば怪しまれないしな」

「す、水筒・・・」

確かに液体である血を持ち運ぶには水筒が便利に違いない。

でも、だからって水筒・・・これから水筒、使えない。

寿々菜はますます気分が悪くなった。が、武上は職業上、和彦は性格上、全くもって平気らしく、会話は淡々と進んで行く。

「死体を持ち帰った、か。まあ、筋は通らないけど有り得ない話じやねーな」

「だが帰りは栄子さんもいる。犬の死体と栄子さんの両方となると、犯人は複数かもしれない。和彦のファンが犯人だとしたら女集団の可能性が高い」

「女が犬を殺して血をばら撒いたのか？こわいねー。犬の死体が出てきたら、何か手がかりが出るかもな」

「そんなこと、言われなくても分かっている。今、栄子さん班と犬班の2つに分けて搜索をしている」

「犬班か。なんか面白いな、それ。武上も犬班に入れよ」

「笑い事じゃないぞ、全く」

だがまあ和彦が元気になってきたのはいいことだ。

武上は和彦に言われたからという訳ではないが、犬班に合流すべく警視庁を後にした。

「そんなことになってたのね」

看護婦の高井戸薫は1つずつ滅菌され袋詰めにされている注射器を丁寧にトレーに並べながら眉を寄せた。

「酷いことをするファンもいたもんね」

「薫さんも人のことは言えないと思いますけど」

寿々菜はクルクル回る椅子に腰かけ、クルクルと回りながら薫を睨んだ。が、薫も負けてはいない。

「わざわざご報告ありがとう。さ、帰って。土曜日でスウちゃんは学校が休みかもしれないけど、病院は休みじゃないんだから」

「休みじゃないんですか？土曜は診察ないじゃないですか」

「病院が休みだったらどうして私がここにいるのよ」

「こもつともである。」

「外来はなくても、入院患者さんはいるから24時間体制よ。KAZUさんが入院した時だって、いつでも誰かがいたでしょう？」

「そっかー。大変ですね、看護婦さんも」

「そうよ。24時間働いてるのは芸能人だけじゃないんだから。まあスウちゃんは1時間も働いてないみたいけど」

「・・・」

これまたこもつともで、反論のしようがない。

そしてそれ故にこうして寿々菜は病院に栄子の事件のことを「ご報告」に來れているのである。

「と、とにかく最近怪我をした犬が運び込まれたりしてませんか？」

「ここ、動物病院じゃないから」

「じゃあ、犬に噛まれた人とか！」

「それなら外科ね。外科は違う病棟だから、エレベーターで一旦外に出てちょうだい」

「薰さん」

「第一、そんなこと部外者である私に簡単に話しちゃっていいの？ テレビでもそんなニュース流れてないじゃない」

うつ、と寿々菜は詰まった。確かに事件のことは口外しないよう社長からも警察からも強く言われている。騒ぎが大きくなると犯人を刺激する可能性があるし、事務所としてもKAZUの名前に傷がつくようなことは避けたい。ましてやこれがKAZUファンの犯行となると・・・

「それ、本当にKAZUのファンの犯行なのかな」

回診から戻ってきた坂井医師が会話に入ってくる。坂井は薰と違って寿々菜を追い返したりしないので、寿々菜は大歓迎だ。

「どういうことですか？」

「僕は男だから女性ファンの心理は分からないけど、いくらKAZUが好きでも、犬を殺してホテルを血で汚し、婚約者を連れ去るなんて事やるかな？」

「それは・・・ファンって色んな人がいますから・・・」

現に和彦に毒入りチョコレートを食べさせ、この病院に入院させたのも和彦のファンだった。過激なことをするファンがいてもおかしくはない。が、実はそう言う寿々菜自身も、今回のことは少々行き過ぎている気がしていた。

「じゃあ、そのファンの子供はどうやってあの日、KAZUの婚約者がホテルでウェディングドレスの試着をしてると知っていたんだろっ」

「え？」

「犬殺しはともかく、人を1人さらうには相当綿密な計画が必要だ。犯人は当然事前にあの日あそこにKAZUの婚約者がいたことを知っていたはずだよ」

「それってつまり、ホテル内の誰かが情報を流したってことですか？」

「もしくはホテル内の人間が犯行に関わっているかもしれない」

「！」

自分はともかく、和彦や武上もどうしてその可能性に気付かなかったのか、と寿々菜は驚いた。おそらく総支配人である倉屋宗太郎の人柄のせいで、「ホテルの人間は全員いい人」という先入観があったためだろう。

だが、確かにホテル内の人間が関わっていれば、犯行はかなりやりやすくなる。

それに「全員いい人」と言いつつ、小次郎のような不思議人間もいる。

「そうだとしたら、栄子さんはホテルの中で監禁されてるかもしれないですね！」

「うん。灯台下暗しってやつだ」

「ありがとうございます！早速武上さんに話してみます！」

寿々菜は背中から聞こえてくる、薫の「あの子、何しに来たのかしら」という声は無視し、来た時より遥かに勇ましい足取りで土曜日の病院を出て行ったのだった。

第12話 殺人事件？

「Tホテルの部屋なら全室調べましたよ」

武上の言葉に、寿々菜はがっかりした。そんな寿々菜を見て武上も、「嘘でもいいから『なるほど！そうですね！』と言えばよかった」と後悔した。

はあ・・・これだからダメなんだよな、俺は。

まあそういう訳でもないだろうが、寿々菜が武上を「頼りになるお兄ちゃんみたいな刑事さん」としか見ていないのは事実だ。その原因はもちろん、

「客室以外は？リネン室とか従業員の休憩室とか」

とラーメンをすすりながら訊ねた和彦だ。

和彦の昼休みに合わせてここ「来来軒」でランチミーティング・・・と言えはなんだかとおかつこいいが、要は昼ご飯を兼ねて事件の進捗状況を武上から聞きだすべく集合したのである。しかしあまりその意味もないようだ。

「そこも調べた。今、周辺のホテルも調べてる。空き家とかもな」
「犬の方はどうです？」

犬好きの山崎も黙ってはいられないらしく武上に訊ねたが、武上は

首を横に振った。

「犬もまだ見つかっていません。人間を探すより犬を探す方が大変ですよ。下手をしたら生ゴミで捨てられている可能性もあります。まあ、人間でもバラバラにすれば・・・あ、いや、山崎さん、例えばの話ですよ、例えば」

山崎に睨まれ、武上は語尾を濁しつつ餃子を口に入れた。しかし。

「そうなんですネ・・・なんだ、やっぱり武上さん達は、犯人がホテル関係者かもしれないって気づいてたんだ・・・」

しょんぼりとした寿々菜の言葉に、武上は再び顔を上げた。

「いえ、そういう風に思っている訳じゃありません。犯人がホテルに宿泊して犯行の機会を伺っていた可能性があるので、調べただけです。無駄足でしたけどね」

と、肩をすくめる。

「警察は今、和彦のファンの犯行という線で動いてますが、ホテル関係者が怪しいとは思ってません。ホテル関係者についても一応調べていますが、熱狂的なKAZUファンはいなさそうですし」

「わかんねーぞ。俺のファンはどこにでもいるからな。実は小杉が俺の隠れファンなんてオチも・・・」

「黙ってる、和彦。でも寿々菜さんの言う通り、もう少しホテル関係者を調べたほうがいいかもしれませんね」

「え？」

「犯人がホテル関係者だとしたら、犯行の目的は和彦の結婚へのイ

ヤガラセじゃないかもしれません。例えばホテルに恨みを持つている従業員とか。最近不当に解雇された従業員や、経営陣と折り合いの悪い従業員、同僚と上手くいっていない従業員なんかがいなか、調べてみます」

「経営陣と折り合いの悪い従業員・・・」

和彦は何かを思い出したように、右手で箸を弄びながら呟いた。それを聞き逃す武上ではない。

「なんだ、和彦。心当たりでもあるのか？」

「いや。でも、経営陣と折り合いの悪い経営陣なら知ってるぞ」

「は？」

「いつちょ当たってみるか」

刑事ドラマならここで颯爽と席を立つのだろうが、来来軒のラーメンを目の前にそんなことをする和彦ではない。汁まで残さず平らげた後、デザートまできっちり腹に収めてから立ち上がったのだった。

しかし、もしこの時和彦たちがすぐに来来軒を出発していれば、事態はまた変わっていたのかもしれない・・・。

「倉屋ですか？」

受付の女性は顔をしかめた。いきなり総支配人を出せと言われれば警戒するのも当然かもしれない。だが和彦たちが尋ねてきたのは、総支配人の倉屋宗太郎の方ではなく・・・

「倉屋小次郎さんの方です」

「あ、なんだ。そっちですか」

受付の女性の緊張が一気に緩む。だがあまり良い緩み方ではなさそうだ。

「分かりません」

「は？」

「小次郎さんはいつもブラブラしているので、今どこにいるのか分かりません。もしかしたら外で遊んでるかも」

「・・・」

困った男である。これでは万一逃亡しても2、3日はいなくなったことにも気付かれないだろう。

「何とか連絡を取れないでしょうか？小次郎さん、携帯はお持ちですよね」

「持ってますけど・・・ちゃんと料金払ってるのかな。止められないかな」

受付の女性は独り言を言いながらも、手元のメモ帳に小次郎の携帯の番号を書いてくれた。早速武上が自分の携帯でその番号にかけてみる。

「——ダメだ、出ない」

「電源は入ってるか？」

電源が入っていない栄子の携帯に悩まされている和彦が思わず聞く。

「電源は入ってる。出ないだけだ。気付いてないのかな」

武上がもう一度電話をかけようとしたその時。

「刑事さん！」

倉屋が・・・ただし、兄の宗太郎の方が血相を変えてロビーを走って横切ってきた。いつも冷静で穏やかな宗太郎にしては珍しい。

「ちょうど良かった！」

「どうされたんですか？」

「来て下さい」

「え？ちよ、ちょっと待ってください」

しかし宗太郎は言うことを聞かず、武上の腕を引っ張っていく。寿々菜、和彦、山崎は驚いて一瞬取り残されたが、もちろんすぐに2人の後についていった。

「どうしたんですか？」

「大変なことに・・・」

「もしかして栄子さんが！？」

思わずそう言った武上に、宗太郎は首を傾げた。

「栄子さん？」

「あ。和彦・・・岩城さんの婚約者の・・・ニックネームです」

そつだ。「栄子」は本名じゃないんだつた。
本名は確か・・・

だが武上が栄子の本名を思い出すより先に、宗太郎が言った。

「岩城様のご婚約者様のことはありません。・・・関係はあるのかもしれないが・・・」

「え？」

宗太郎が武上を連れて行ったのは、ロビーのすぐ上の階の客室だった。その扉の前には、ベルボーイが門番よろしく立っているが、顔が真っ青なのでなんとも頼りない。

和彦はそれが、以前このホテルに栄子と泊まった時、部屋に来て栄子を見ていたベルボーイであることに気が付いた。

宗太郎はベルボーイに「このままここにるように。誰も入れるな」と言つて扉を開いた。安い部屋なのか一目で全体が見渡せる程の広さで、そのほとんどをシングルベッドが占めている。部屋は綺麗にセツトされていた。

「こちらです。掃除に入つた従業員がたまたま見つけました」

宗太郎は入り口のすぐ隣にある扉を開いた。トイレと風呂が一緒になっているユニットバスである。見ると、閉じられた便器の蓋の上に服が置いていある。それは男物で・・・

「きゃっ！」

寿々菜が短い悲鳴を上げて和彦の後ろに隠れた。

「これは・・・」

武上もさすがに言葉を失った。

倉屋小次郎が小さな風呂の中に沈んでいる。
そこに張られた湯は赤く染まっていた。

「・・・死んでますよね？」

宗太郎が恐る恐る武上に訊ねたが、答えるまでもない。

「１１０番して下さい。このことを知っているのは？」

「私と先ほどのベルボーイと、掃除に入った従業員の３名だけです」

「掃除の方は？」

「気分が悪くなったので、別の部屋で休んでいます」

「そのまま帰らせないで下さい」

「はい。あの・・・刑事さん。ここにはお客様が大勢いらっしゃいます。できるだけお客様の迷惑にならないよう、お願い致します」

そう言つて頭を下げた宗太郎は、被害者の兄ではなくホテルの総支配人の顔だった。

第13話 人となり

やはり間違いなく小次郎は死んでいた。死因は手首の傷。部屋に他の人間がいた形跡もないので、自殺だと考えるのが妥当だ。

だが、鑑識が作業をしている間廊下に追いやられている面々は皆、そうとは思っていないかった。

「あいつは自殺なんかするタマじゃないだろ」

和彦のその言葉こそが、全員の気持ちを代弁している。小次郎を直接知らない山崎でさえ、小次郎の人となりを聞いたところから想像するに、自殺ではないと思っていた。

「女だな」

「だろうな」

「でしょうね」

和彦、武上、山崎の声が重なる。しかし宗太郎の意見は少し違うようだ。

「おつしやる通り、小次郎はタダだからと言ってこのホテルに女を連れ込むことはよくありました。でも、そういう時は女に見栄を張るためにもっといい部屋を使います」

宗太郎は少し青ざめながらも、部屋の中をしっかりと見つめながらそう言った。このシングルの部屋は確かに、見栄を張るには安っぽすぎる。和彦も、小次郎の性格を考えるとここに女を連れ込んだりはしないような気がした。

「では、自殺だと？」

武上が訊ねる。

「それは分かりません。小次郎の性格上、自殺はなさそうな気はしますが……。でも、この状況で女はないと思いますから、やはり自殺なのかもしれません」

「なるほど、分かりました。貴重なご意見、ありがとうございます」

武上はメモを取り、部屋を再度確認すべく中へ入って行った。

一方寿々菜はまた違和感を感じていた。以前感じた小次郎への違和感が解決しないまま小次郎は死んでしまったというのに。

そうだ。宗太郎さんにも違和感を感じたんだった。

フィッティングルームが血だらけだった日、なんだか怒ってるみたいだったんだっけ。

寿々菜は気付かれないように宗太郎を見た。今日は怒っている様子はない。ただその代わりに随分と神経質になっているようだ。自分のホテル内で人が死んだのだから当然と言えば当然なのかもしれないが……。

分かった。この人、今日は全然悲しんでないからだ。

弟が死んだのに全然悲しんでないから、違和感を感じるんだ。

世の中には色々な兄弟がいるので、弟が死んでも兄が悲しまないということもあるだろう。だが自分にも姉妹がいる寿々菜は、どうしても「兄弟が死んだのに悲しまない」ということに違和感を覚えてしまう。

・・・ううん、それだけじゃない。なんだか弟の死よりも、何か他のことを気にしてるみたいに見える。
まるで・・・犯行の発覚を怖れている犯人みたいに。

「和彦さん」

「・・・ん？」

寿々菜は和彦の気の抜けた返事に少し驚き、和彦を見た。

「どうしたんですか？」

「別に。寿々菜こそ、何だよ？」

「・・・」

寿々菜は今度は山崎を見た。山崎が寿々菜に、黙って首を振って見せる。

栄子発見の手がかりになるかもしれない小次郎が死んでしまったのだ、和彦も落ち込んでいるのだろう。

「いえ、なんでもありません」

「何だよ、気になるだろ。違和感か？」

「えっと・・・」

「もしかして風呂のことか？」

「え？」

思わぬことを言われて、寿々菜の方が驚く。風呂になど、何の違和感も覚えなかった。

「それは僕も思いました」

山崎が引き継ぐ。

「スウは宿泊しないといけないような仕事がないから、こんな部屋に泊まったことがない」

「だ、だからなんなんですか！」

「だから違和感を覚えないんだ。和彦さんや僕、それに武上さんも・
・普通の大人なら、こういう部屋に泊まったことがある」

「こういう部屋ってなんですか？」

寿々菜が口を尖らせて山崎に言う。寿々菜だって、仕事で宿泊はなくても、家族旅行や修学旅行でホテルに泊まることはある！（威張れない）

「そういう場合は、大浴場のあるホテルばかりだろう？都内のこういうホテルは大浴場がないからユニットバスが一般的だ。普通、ユニットバスにはお湯を張ったりしない。シャワーだけだ」

「じゃあ、どうして小次郎さんはお湯を張ってたんですか？」

「だから、そこが変なんだ。ねえ、和彦さん？」

「ああ」

和彦が頷く。

実はもう一つ、和彦にはこの部屋の中で「変だな」と思うところがあるのだが、余り自信がない。もしかしたら自分の勘違いという可

能性もあるので、それは言わないことにした。

「考えられるのは、他殺の場合なら犯人が薬で小次郎を眠らせて湯を張った湯船に入れたってことだな」

「どうしてそんなことするんですか？」

「その方が、切った手首から血が流れやすくなって早く死ぬ」
「・・・」

これまた気持ち悪い話である。

「でもそれだったら、シャワーを手首に当てるだけでも同じ効果があるから、わざわざ裸にして湯船に入れた理由がよく分からない」

「じゃあ・・・」

「後、ユニットバスの湯船なんかには湯を張った理由として考えられるのは・・・他殺にしろ自殺にしろ、小次郎が寿々菜みたいのに、こーゆー風呂には湯は張らないって常識を知らずに自分で湯を張った。ま、さすがに大の大人がそんなことはないだろうけど」

「有り得ます」

そう言ったのは、宗太郎だ。

「有り得る？」

「はい。うちは昔からそれなりに裕福な家庭で、外泊する時は必ず部屋に独立した大きな風呂が付いている部屋でした。小次郎がこのホテルで女と使う部屋もセミスイート以上ばかりでしたから、トイレとは別に風呂があります。小次郎はこんなユニットバスなんて使ったことがないと思います」

「使ったことはなくても、常識として知ってるだろ、普通。それにホテルで働いてるんだし」

「あまり『普通』の人間ではありませんでしたから。それにホテル

で働いていると言っても仕事らしい仕事はしたことはありません。
仕事で客室に入ることなどなかったはずです」

それはそれで凄いな。

和彦は妙に感心してしまった。普通に考えればそんな人間いなさそうだが、確かに小次郎なら「有り得る」。

「じゃあ、あんたは本当に、小次郎が生まれて初めて見るユニットバスの使い方が分からず、自分で湯船に湯を張って入った、っていうのか？」

和彦も段々「素」が出てきた。

「おそらくは」

「んで、その次は？小次郎はどうやって死んだと思う？」

「さあ・・・しかし先ほども申し上げました通り、女をここに連れ込んだとは考えにくいですし、女以外の誰かが一緒だとすれば、それは客人ということになります。来客中に風呂に入るというのも考えられません」

「あいつならありそうだけどな」

「はあ、まあ」

そんなことはありません、と兄もかばってやれないのが辛いところだ。

「しかし普通に考えれば、小次郎は一人でこの部屋にいて、湯の張った風呂に入りその中で自殺した、ということになると思います」

「そうだな。でも、それこそ最期をこんな部屋で迎えるか？どうせ

死ぬならユニットバスなんかじゃなくて、それこそスイートのデカイ風呂で自殺すればいいじゃねーか」

「そこまではなんとも。もしかしたら小次郎は、自分の死後こうやって警察が来て部屋を封鎖されるだろうということまで考えて、スイートより普通の部屋の方がホテルの損害が小さくて済む、と思ったのかもしれない」

「それこそ、有り得なさそうだけどな。迷惑かけたくないなら、ホテル以外の場所で死ぬよって感じだし」

「はあ、まあ」

人望がない人間というのは死してもなお人望を得ることはない、ということがよく分かる会話であった・・・。

第14話 現場検証

「部屋に倉屋小次郎以外の人間がいた形跡はなし。部屋の状態から、小次郎は1人で部屋に入り、真っ直ぐ風呂へ向って湯船に湯を張り、その中で手首を切って自殺したと思われる。カミソリが湯船の淵で見つかっている」

武上は報告書をかいつまんで読み上げた。

「ちなみに遺体からは多量のアルコールが検出された」

「酒飲んで風呂入って手首切って自殺？一番楽そうな死に方だな」

和彦が鼻で笑う。

「まあ、酔って痛みは感じなかったかもしれないな」

「遺書は？」

「見つかってない。計画的な自殺じゃないくて、ふと『死のう』と思いつての自殺なら不思議はない。状況からしてそんな感じだな」

「ふーん」

和彦は丸めた台本でポンポンと自分の手の中を叩きながら、青空の下を走り回っている子供達を眺めた。と言っても、のどかな休日という訳ではない。和彦は今、ドラマの撮影の為に公園に来ていて、子供達もみんな役者である。

婚約者が行方不明でも、殺人が起きても、仕事はやってくるのだ。ちなみに寿々菜は・・・もちろん仕事はなく、今日もいつも通り学校へ行っている。

「今度のドラマはなんなんだ？どうしてあんなにたくさん子供がいる？」

「保育士のドラマ」

「・・・誰が？」

「俺が」

「・・・」

世の中には迷宮入りした殺人事件より不思議な出来事があるものだ。武上は「絶対ミスキャストだ」と思いながらも、もはやそこに触れるのも面倒で、和彦に別のことを訊ねた。

「で、話ってなんだ？仕事中の刑事を呼び出してるんだから、それなりの話なんだろうな」

「もちろん、あのホテルでの件だ。小次郎の自殺は置いといて、警察は誰が犬殺しの犯人だと思ってる？」

「それは・・・」

武上が口ごもる。犯人の目星がついていないのではなく、警察内の情報をペラペラと和彦に話してよいものか悩んでいるのだ。それに他にももう1つ、和彦に話しづらい理由がある。

「当ててやろうか。警察は犬殺しは小次郎の仕業で、小次郎はそれを気に病んで自殺した、と思ってるんだろ」

「・・・」

「ついでに、犬殺しの犯人の小次郎が死んだとなると、行方不明の俺の婚約者へ繋がる手がかりもなくなった、だから困ってる」

「・・・」

「しかも犯人が自殺してるくらいだから、小次郎はただ犬を殺しただけじゃなくて、俺の婚約者も殺したと思われる。そんなところか」

その通りだ。敢えて頷かなくても分かるだろうと思い、武上は黙ったままでいた。状況と経験から考えて、こういう場合行方不明者が生きている可能性は低い。

「やっぱ警察はバカだなー」

和彦がせせら笑う。

「なんだ。違うつていつのか」
「違う」

無然とする武上に対し、和彦はそう言い切った。

「それじゃ解決できない疑問が多すぎるだろ。まず犬殺しの犯人は、何故一度ホテルに持ち込んだ犬の死体をわざわざまた運びだしたのか。あの事件の時に寿々菜が宗太郎と小次郎に感じた違和感は何なんだったのか。小次郎はなぜあんなちゃっちゃい部屋のユニットバスで自殺したのか」

「・・・」

そこは武上もひっかかっている。加えて言うなら、犬殺しの犯人が小次郎だとすれば、動機はホテルと兄へのイヤガラセだと思われるが、それだとどうして栄子連れ去ったのが分からない。

だが、武上はひっかかっているにも、警察はそんな些細な疑問は気に留めないのだ。警察にとっては、寿々菜の違和感など調べるに値しないし、犬殺しの犯人が犬の死体を持ち帰ったのも「そうしたかったからそうしたのだろ」という理由で片付けられる。栄子連れ去ったのも「栄子が綺麗だったから思わず」と考えることができるし、自殺の仕方をどうやって選んだかなど死んだ本人しか分からない

い。小さなユニットバスに湯を張ってその中で自殺することもあるだろう。

とにかく警察にとって重要なのは、犬殺し・栄子誘拐の犯人らしき倉屋小次郎が自殺した、という事実と、栄子がまだ見つかっておらず殺されている可能性が高い、ということだけだ。

武上1人では警察全体の考えは変えられない。

「これだから日本の警察は。もっと細かい謎を1つ1つ丁寧に解決してみろってんだ」

「そんなことしてたらいくら時間があっても足りない。殺人事件は毎日のように起きてるんだ」

「ほー。じゃあ今回の件はどうでもいい、と」

「そういう訳じゃない・・・今、全力で栄子さんを捜してる」

「前もそんなこと言ってただろ」

「・・・」

いつも以上に手厳しい和彦に武上も反論できない。

「まあいい。警察が動けないんなら、俺が勝手に動くまでだ」

「おい、勝手なことをするな」

しかし武上の制止を聞く和彦ではない。武上を当たり前のように無視して、少し離れたところで待機している山崎を呼んだ。

「どうしました、和彦さん」

「今日は何時に終わる？」

「20時までドラマの撮影で、その後雑誌のインタビューです」

「雑誌は明日に回してくれ。撮影が終わったらホテルに行く」

「分かりました。お供します」

分かってしまうのか。だが雑誌側もまさかKAZUを「じゃあもういい」と切ることはありえない。それが分かっているから和彦も山崎も強く出れるのだ。

「・・・これだから芸能界は嫌いだ」

武上が呟く。

「何言ってる。強い者の意見は間違っても通るってのは警察も一緒だろ。ん？」

「・・・」

「武上也来たかったら来てもいいぞ。強い者の意見は無視して」

「・・・」

「寿々菜も呼んでやらないと拗ねるな。山崎、呼んどいてくれ」

「はい」

こうしていつものメンバーは午後8時過ぎ、Tホテルに集合するようになったのだった。

「岩城様！」

ホテルのロビーを歩いていると、ブライダルサロンから小杉が飛び出してきた。サロンには結婚式相談に来たらしきカップルが見えたが、小杉はそのカップルをさて置き、和彦のところへやってきたらしい。

「こんばんは」

「こんばんは・・・あの、新婦様は・・・」

「まだ見つかってません」

「・・・そうですか」

小杉は肩を落とした。栄子がさらわれたことにまだ責任を感じているようだ。

「あの・・・こんな時に申し訳ありません、お式のことですが・・・」

当然キャンセルだろう。なんと言っても新婦がいなくなってしまうのだから。
ところが。

「予定通り挙式する段取りでお願いします」

「え？」

和彦の言葉に驚いたのは小杉だけではない。和彦と一緒にいる寿々菜・武上・山崎も目を見開いた。

「でも・・・よろしいんですか？」

「はい。このまま式を挙げるつもりにしておいた方が、無事に見つかる気がするんです」

「・・・そうですか・・・」

小杉が涙ぐむ。ついでに何故か寿々菜まで涙ぐむ。

和彦さん、本当に栄子さんのことが好きなんだ・・・。

しかしもうそこに嫉妬はない。寿々菜も心の底から栄子が無事に見つかって欲しいと思った。

「かしこまりました。では予定通り挙式する方向で進めます」
「はい、お願いします。ところで、」

和彦は小杉にKAZUSMILEを向けてこう言った。

「あのフィッティングルーム、見せてもらえませんか？」

第15話 ヒント

数日前血まみれだったフィッティングルームは何事もなかったかのように以前の状態に戻っていた。と言っても、和彦も寿々菜たちも以前の状態を知らないのだが、あの現場を見ていなければとてもではないがここであんな事件があったとは思えないほど綺麗だ。

「もう使ってるんですね」

和彦がそう言うと、小杉は申し訳なさそうに頷いた。

「はい。すみません」

「どうして謝るんですか？ちゃんと警察の許可も取ってるんでしょ？」

「はい、もちろんです。でも、」

「岩城様には申し訳ありません」

後ろから別の声が小杉の言葉を続けた。振り向くと、いつの間にか衣裳部屋に倉屋宗太郎が入ってきている。

「岩城様がいらっしゃっていると聞いて、参りました」

宗太郎が頭を下げる。

「まだあの事件が解決していないのにここを普通に使用することは、岩城様にとって不愉快なのは百も承知です。ですが、お式の近いお客様もいらっしゃいますし、ウエディングドレスのフィッティングルームはここしかありません。申し訳ありませんがお許しください」

「そんなことは別に構いません。それにしても随分綺麗になってま

すね」

小次郎が死んだ時、宗太郎と小杉には既に素を見せている和彦だが、こんな場所できちんとした態度を取られると、思わずKAZUモードになってしまう。自分でもなんだか気持ちが悪い。

「壁紙は張り替えました。床はフローリングなので掃除しただけですが」

「犬の毛がたくさんあって大変だったんじゃないですか？」

「いえ、大体は警察の方が掃除して下さったので、毛は落ちていませんでした」

武上の眉がピクツと動いた。しかし和彦は武上に構わず続ける。

「小次郎さんが亡くなった部屋ももう使ってるんですか？」

「はい。小次郎は自殺の可能性が高いということで、あの部屋の使用許可は翌日に出ました。特に汚れたりしていませんでしたので、掃除だけして使っています」

「じゃあお客さんはあの部屋で自殺があつたなんてことは知らずに泊まってるんですね」

「それはまあ・・・そうです。それは仕方のない事です。何かあった部屋をいちいち使用禁止にしていたら、日本中のどのホテルも経営が成り立ちません」

「それもそうですね」

和彦は笑顔でそう言うと、フィッティングルームを出て、そのまま衣裳部屋も出た。そして廊下で宗太郎に振り返る。

「あの部屋も見せてもらっていいですか？」

「今はお客様が宿泊されています」

「じゃあ、同じタイプの部屋を」
「かしこまりました」

宗太郎は受付の中に立っているベルボーイに声をかけようとしたが、それより先に和彦は栄子を見ていたあのベルボーイがロビーに入ってきて来るのを見つけ、その腕を掴んだ。

「おい。小次郎が死んだのと同じタイプの部屋に案内してくれ」
「え、そんな・・・勝手にそんなことはできません」
「総支配人様がいつて言ってたんだよ。さつさとしろ」

ベルボーイは、自分の腕を掴んでいるのが誰なのかようやく分かり、青くなった。

「あ・・・あの時の・・・KAZU・・・」
「いーから早くしろ」

宗太郎が頷いて見せると、ベルボーイは「かしこまりました」と姿勢を正し、若干頼りない足取りで先頭を歩き出した。和彦・武上・寿々菜・山崎、そして宗太郎・小杉とその後が続く。

「こちらです」

案内された部屋は小次郎が死んだ部屋の3つ右隣の部屋だった。入ってみると、左右対称ではあるが確かに小次郎が死んだ部屋と同じタイプの部屋である。もちろん風呂場に死体はないが。

「寿々菜」
「はい」

和彦が寿々菜を部屋の中央に呼ぶ。ただ、中央と言っても部屋のほとんどもベッドなので寿々菜はベッドの目の前に立つ形になった。

「何か違和感、感じるか？」

「え？ここですか？」

寿々菜は辺りを見回した。確かに小次郎が死んだのと同じタイプの部屋ではあるが、そうは言っても違う部屋だし綺麗に掃除もされている。ここで何か感じるかと言われても困ってしまう。

寿々菜は取り敢えずユニットバスを見に行ってみたが何も感じず、再び部屋の中央に戻ってきてもう一度部屋全体を見回した。

「何も感じません」

「じゃあヒントだ。ベッドをよく見てみる」

言われた通り、目の前のシングルベッドをじっと見てみる。確か小次郎が死んだ時も、部屋は綺麗でベッドもきちんとベッドメイクされたままで・・・

「あれ」

「なんか感じるか？」

「・・・はい。でも分かりません。前のベッドと何かが違う気はするんですけど。なんか、この辺が・・・」

寿々菜はベッドの下半分を指で円を書くようにさした。

「武上。あの時の部屋の写真、あるか？」

「倉屋小次郎の写真は持ってるが、ベッドの写真なんかいちいち持ち歩いてる訳ないだろう」

「使えねーなあ」

和彦はため息をついてベッドにドカツと座った。安い部屋だとは言っても一流ホテルだ、座り心地は悪くない。

「でも、だいぶん分かってきたぜ」

「何が？」

「誰が何のために何をしたのか」

意味深な和彦の言葉に、それぞれがそれぞれの顔を見る。

「聞きたいか？」

和彦がニヤツと笑って武上に訊ねた。正直、武上は聞きたいと思っている。しかし刑事のプライドにかけてそれを素直に言葉には出したくない。特に和彦に対しては！

「私は聞きたいです！」

「僕もです」

和彦ファンの寿々菜と山崎が武上に代わって素直にそう言う。武上は「ふん」と鼻を鳴らしたが、内心ホツとしていた。和彦もそれを分かっているのかニヤニヤして足を組む。

「よしよし、じゃあ聞かせてやろう。まずは犬殺しの件だ。おい、武上」

和彦が武上呼びかける。武上もそれだけで和彦の意図していることが分かってしまうのだから、自分で自分が情けない。それでも和彦の思い通りにやるしかない。これはどちらにしろ警察の仕事だ。

「倉屋さん。先ほどあなたは、和彦が『犬の毛がたくさんあって大変だったんじゃないですか？』と聞いた時、『いえ、大体は警察の方が掃除して下さったので、毛は落ちていませんでした』と言いましたね？」

「はい」

「どうして犬のことを知ってるんですか？」

「・・・え？」

「あの事件は世間には公表されていませんし、血が人間の物ではなく犬の物だということを知っているのは警察と和彦たちだけです。混乱を避けるためにホテル関係者にも話していない。あなたが知っているはずがないんです」

「・・・」

宗太郎は黙ったままじつと武上の顔を見た。

第16話 ヘッドメイキング

フィッティングルームの血が犬の物だとして知っているのかと聞かれ、沈黙する宗太郎。その沈黙を和彦が「素」で破る。

「当ててやろうか。あんたは見たんだ、フィッティングルームで犬が死んでるのをな」

「・・・」

「犬を殺してフィッティングルームに持ち込んだのは、やっぱり小次郎だ」

犬好きの山崎が大きく顔をしかめる。

「ホテルの裏口から犬の死体を持ち込んだ小次郎は、小杉がいなくなった隙にフィッティングルームに入って血を撒き散らし、犬の死体を置いて逃げた。動機はあんたへのイヤガラセかなんだろ。でもあんたは小次郎がフィッティングルームから出て来るのを見つけて不審に思い、フィッティングルームに入った。そしてそこでの惨状と犬の死体を見つけたんだ」

「ちよつと待て」

武上が和彦を止める。

「栄子さんは？その時フィッティングルームには栄子さんがいたはずだろ」

「その話は後だ。とにかくあんたは、なんとかしないと悪い、取り敢えず犬の死体を運び出した。だけどその間に小杉が戻ってきて大騒ぎになってしまい、あんたは仕方なくフィッティングルームには戻らずに部下が報告に来るのを待ち、事件を初めて知っ

たような顔でフィッティングルームに駆けつけた。その時のあんたを見て寿々菜が『怒ってた』と言ってたけど、そりゃ弟があんな騒ぎを起こしたら怒りたくもなるよな」

宗太郎はしばらく微動だにしなかったが、やがて肩から力を抜いて頭を下げた。

「おっしゃる通りです。黙っていて申し訳ありませんでした。総支配人である私の弟があんなことをしたと世間に知れると、お客様の足が遠のきます。なんとか秘密裏に処理をしたくて、警察にもお話しませんでした」

「犬の死体は？」

「山に埋めました」

「1人で？」

「はい」

「小次郎はそのことを知ってたのか？」

「はい。あの夜、小次郎の家を訪ねて話しました。・・・喧嘩になりましたけどね」

それを聞いて寿々菜がポンと手を打った。

「フィッティングルームを見た小次郎さんの様子がおかしかったのは、置いておいたはずの犬の死体がなかったからなんですね！」

和彦が頷く。

「小次郎はあの時まだ兄が犬の死体を処理したと知らなかった。知ったのはその夜だからな。で、喧嘩した拳句、あんたは自殺に見せかけて小次郎を殺したって訳か？」

「・・・」

宗太郎は黙った。しかしそれは和彦の言い分を認めているのとは少し違うようだ。

和彦は宗太郎がどう出るか待つことにした。

「・・・そうです」

長い沈黙の後、宗太郎ははっきりとそう言った。

武上の雰囲気が変わる。

「本当ですか？」

武上は少し厳しい口調で訊ねた。

「はい」

「どうやって？」

「難しいことはしていません。小次郎に酒を飲ませ、あの部屋に連れ込んだ。風呂に入るよう勧めて、風呂の中で眠ったところを狙って左手首を切ったんです」

「何故あの部屋で？」

「自殺に見せかけましたが万一他殺とばれた場合、現場が小次郎の自宅だと容疑者にすぐに私があがると思ったので、このホテルを選びました。あの部屋にしたのは、警察に部屋を封鎖された場合の損害を考えてのことです」

「手袋は？」

「私の指紋ならこのホテルのどこから出てもおかしくはありませんが、一応しました。小次郎の左手首は、眠っている小次郎の右手にカミソリを持たせて切ったので、カミソリからは小次郎の指紋しか出ていないはずですよ」

武上はみんなに分かるように大きく頷いた。宗太郎の言っていることに間違いはない。確かにカミソリからは小次郎の指紋しかでなかった。

小杉が両手を口に当て、目を潤ませる。

「宗太郎さん・・・」

「すまないね、こんなことになって。どうしても小次郎を許せなかったんだ」

「・・・」

宗太郎は慰めるように小杉にそう言つと、武上に向き直つた。

「さあ、どうしたらよろしいでしょう？武上さんと一緒に警察に行けばいいですか？これは自首というのでしょうか？」

「そうですね・・・。でもその前にもう1つ教えてください。栄子さんは・・・和彦の婚約者の女性はどこにいるんですか？」

すると宗太郎は、今度は首を横に振つた。

「実は私もそれは分らないんです。私がフィッティングルームに入つた時には、誰もいませんでした。小次郎にも聞きましたが、知らないと言っていました」

「小次郎さんが嘘をついていたということはありませんか？」

「あるかもしれませんが、どちらにしろ小次郎から居場所を聞き出すことはできませんでした」

「・・・」

宗太郎こそ嘘をついているのかもしれない。だが武上は直感ではあるがそうとは思えなかった。宗太郎は栄子のことを本当に知らない。

そしておそらく・・・小次郎も知らなかったのではないだろうか。

「武上。だからそのことはちょっと待て。まだ大事なことがある」
「大事なこと？もう事件は栄子さんのこと以外全部解決しただろ」
「してない」

和彦はそう言つてベッドから立ち上がると、何を思ったのか突然ベツドのシーツを剥がし、掛け布団もろとも床に落とした。

「Ｔホテルマンのお手並み拝見といくか。まずはお前だ。ベツドメイキングしてみろ」

和彦に指を差されて驚いたのはベルボーイだ。

「え、お、俺・・・私、ですか？」
「そうだ」

「はあ・・・専門ではありませんが」

ベルボーイは訳が分からないといった感じで、それでもなんとかベツドメイキングをして見せた。本人の言う通りたどたどしくはあったが、まあそれなりの出来である。

しかし和彦は、それをまたすぐに壊した。

「じゃあ次は総支配人様にお手本を見せてもらおう」
「・・・？はい」

宗太郎も普段はベツドメイキングなどしないだろうが、さすが総支配人だけあつてその手つきは鮮やかなもので、先ほどのベルボーイとは比べ物にならない速さで完璧なベツドを作った。
それを見て和彦が満足そうに頷く。

「出来上がりに差はあるが、2人ともちゃんとベッドメイキングできてるな」

「はあ・・・恐れ入ります」

2人とも和彦の意図しているところが分からず、曖昧に応える。寿々菜達も互いの顔を見ながら首を傾げた。

「じゃあ最後だ」

和彦が再びシーツを剥がし、小杉を見た。しかし小杉は無言のまま動かない。

「・・・」

「岩城様。小杉はホテルの従業員ですが、ブライダル専門で客室係ではありません」

宗太郎が小杉をかばう。

「ベッドメイキングできないってことか？」

「はい」

「知識もない？」

「はい。個人的に勉強していれば別ですが」

宗太郎は伺うように小杉を見たが、小杉は何も言わない。

「どうなんだ、小杉？できないんだろ？」

「・・・はい。申し訳ありません」

宗太郎が苦笑いする。

「仕方のないことだ。謝ることじゃない」
「いえ、そうではなく・・・」

小杉は真っ青になって宗太郎を見てから、視線を和彦に移した。
和彦が無表情に言う。

「倉屋さん、小杉が謝ってるのはベッドメイキングできないことに
対してじゃない。2人のベッドメイキングを見て自分のミスに気付
いたからだ」
「ミス？」

宗太郎が戸惑う。

「そうだ。せっかくあんたが小次郎を殺したのは自分だと言ってか
ばってくれたのに、それが嘘だということがバレてしまった。だか
ら謝ってるんだ」

和彦は小杉に「なあ？」と訊ねた。

第17話 再登場？

「小杉。これ、なんて言うか知ってるか？」

和彦はそう言つて、ベッドの上からある物を持ち上げた。

ベッドの下半分、寝転がった時にちょうど足の部分になる場所に掛けられている、帯状の布だ。

「・・・知りません」

「倉屋さんは？」

「はあ。フットスローです。お客様が靴のままベッドに寝転がった時、ベッドが汚れないよう掛けている物です」

「さすがだな。俺も知らなかったから調べたけど、その通りだ。汚れ防止だけじゃなく、飾りとしても使われている。知ってたか？武上」

「知るか」

フットスローはあつてもなくても良い物なので、それなりに質の高いホテルでしかお目にかかることはない。武上のような普通の刑事が知らないのも当然だ。

もちろん、言うまでもなく寿々菜はその存在すら知らない。が、ようやく先ほど感じた違和感の正体が分かった。

「小次郎さんが死んでた部屋のフットスローは、変な場所に掛けてありました！」

「お、良く思い出したな。そうだ、あの時、フットスローはベッドの真ん中に掛けてあつた。俺も最初それを見た時『変だな』と思つたけど、フットスローの役割が分からなかったから、真ん中でもいいのかもしれないと思って何も言わなかったんだ。武上、後で写真

確認しとけよ」

武上が慔然として頷く。

「何故あの時、フットスローが間違った場所に掛けてあったのか？多分フットスローは一度床に落ちたんだろうな。それを誰かが間違った位置に戻した」

部屋中が沈黙する。

「誰が？小次郎が？そうかもしれないな。あのおっさんなら、ホテルマンのくせしてフットスローを知らない可能性もある。でも、部屋を出る時ならともかく、フットスローをわざわざ丁寧に元に戻すとも考えにくい。寝る時は取る物だし、あのおっさんの性格からして、部屋を綺麗に使おうなんて思わないだろ」

寿々菜と山崎が「うん、うん」と頷く。武上は心の中だけで頷くことにした。

「他に考えられるのは、部屋に他に誰かがいて、そいつが戻したって可能性だ。でもそいつもフットスローのことは知らなかったみたいだな。倉屋さんが言う通り、ブライダル専門じゃ仕方がないか」

全員の視線が小杉に集まった。

「もしこれを戻したのが倉屋さんなら、こんな間違った場所に戻したりはしない。そうだろ？」

「・・・はい」

小杉が小さな声で言う。

「部屋を綺麗にしておこうなんて気を回したのが仇あだになったな」
「・・・」

「待ってください、小次郎を殺したのは、」

宗太郎が慌てて会話に割って入る。

「倉屋さん。警察が捜している犬の死体を隠してたことだけでも、罪になるかもしれないんだ。これ以上余計なことは言わない方がいいと思うぜ？」

「しかし、」

「宗太郎さん、もういいです」

小杉が宗太郎を止める。そして和彦と武上に向かってこう言った。

「岩城様のおっしゃる通り、小次郎さんを殺したのは私です。殺した方法とあの部屋を選んだ理由は、さっき宗太郎さんがおっしゃった通りです。私が宗太郎さんにそう言っただからです」

「小次郎を殺したのは、あの犬の件が原因か？」

「小次郎さんは以前から宗太郎さんに迷惑ばかりかけていました。拳句の果てに、結婚前の新婦様方用のフィッティングルームにあんなことを・・・」

小杉が声を震わせる。

「あの血が犬の物であることや、小次郎さんが岩城様のご婚約者様をつれさったのではないということ、宗太郎さんから聞きました。それでも許せなかったんです」

「それで小次郎を誘った」

「はい。一度ベッドに押し倒された時にそのフットスローが落ちま

した。なんとか小次郎さんをなだめて先にお風呂に入らせている間に、なんとなくベッドの凹みを直して、フットスローを戻したんですが・・・何も考えずにベッドの中央に掛けてしまいました」

「そうだな。フットスローの用途を知らなかったら真ん中に掛けちまうだろうな」

武上が小杉に訊ねる。

「あなたは最初から小次郎さんを殺すつもりで部屋に呼んだんですか？あなたが、宗太郎さんのホテルを殺人現場に選ぶのは不自然な気がします」

「違います。最初は小次郎さんと話し合うだけのつもりでした。でもお風呂で眠っている小次郎さんを見ているうちに・・・自殺に見せかけられると思ったんです」

「殺した後、すぐに部屋を出ましたか？」

「はい」

「間違いありませんね」

「はい」

「フットスローを戻したのも、殺す前ですね？殺そうと決めてから戻した訳じゃありませんね？」

「・・・？はい」

小杉は何故武上がこんなことに念を押すのか分からないようだが、和彦には分かった。殺した後にフットスローを戻したとなると、隠蔽工作になる。罪の重さが変わってくるのだ。

「では、今のお話を僕と一緒に警察に行ってして下さい。自首扱いにできると思います」

「はい・・・」

小杉は武上に頭を下げた後、視線を床に落としたまま宗太郎の方を向いた。

「宗太郎さん。色々にご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」「いや・・・僕の方こそ、せつかく君が正直に全部話してくれたのに、結局何の力にもなれなかった。申し訳ない」

「そんな・・・」

「これからどういう風になるのか分からないけど、僕はもちろん君を訴えたりしない。待ってるよ」

小杉が顔を上げる。その瞳からポロポロと涙がこぼれた。

何故かまた寿々菜も泣いている。この2人、どうも涙ポイントが同じらしい。

そして武上はこういう時、雰囲気壊すのが苦手だ。なんだか自分がとても悪者になった気がしてしまう。特に寿々菜がこうでは・・・。だが、武上も刑事だ。苦手でもやるべきことはやらなくてはならない。

「小杉さん、行きましようか」

「はい・・・あの、岩城様」

「ん？」

小杉が涙を拭きながら、和彦に話す。

「新婦様のご無事を祈っております。こんなことを言える立場ではありませんが、もしよろしければこのままこのホテルで結婚式を挙げて頂けると嬉しいです」

「儲かるから？」

「いえ・・・いいえ、そうですね。儲かるからです。私が宗太郎さんに掛けたご迷惑を少しでも取り返したいんです。どうか、よろし

くお願いします」
「もちろんよ」

突然後ろから声がし、全員が驚いて振り返った。驚いていないのはただ1人だけだ。

「お、グッドタイミング。早かったじゃん」

「だって、やっと部屋を出ていいって言うから、嬉しくって。はー、やっぱり外はいいわね」

「外じゃないだろ。ホテルの中なんだから」

「そういう意味じゃないわよ」

寿々菜・武上・山崎そして宗太郎と小杉の頭の上を通り越して言葉がやりとりされる。その度に全員が右を見たり左を見たりと忙しい。

「え、栄子、さん？」

「お久しぶり、スウちゃん。皆さんも」

「・・・今までどこにいたんですか？」

「和彦の家よ」

「和彦さんの・・・」

寿々菜はいまいち状況についていけないが、武上と山崎は慣れと言おうかなんと言おうか、すぐに状況を理解した。

「和彦！！！！」

「和彦さん！！！！」

「まーまー怒るなよ、二人とも。俺としてもかわいい婚約者が泣きながら『ドレスを試着しようと思ったら、フィッティングルームに犬の死体があるの！』って電話してきたら『とにかくその場から離れて俺の家にいる』って言うのも当然だろ？」

武上は和彦が栄子と最後に電話したのが試着直前だと言っていたのを思い出した。

「じゃあ、あの電話って言うのが・・・」

「そうそう。泣きながらかけてきた電話。な、俺、嘘ついてないだろ？」

「泣いてないけどね」

栄子が補足する。

「驚いただけよ。てっきり和彦のファンの悪戯だと思ったから和彦に報告したの」

「それは・・・どういうタイミングで？」

武上が和彦にというか、栄子にというか、目をキョロキョロさせながら訊ねる。

「小杉さんが出て行った後、私、試着の前にトイレに行っただんです。トイレの場所が分からなくて少し迷って遅く帰ってきたら、フィッティングルームに犬の死体がありました」

「で、俺に電話をかけてきた。俺もファンの悪戯だと思ったから、まだそのファンが近くにいたら危ないと思ってその場を離れるって言っただけ」

「それは宗太郎さんがフィッティングルームに最初に来る前か？」
「だろうな」

和彦が宗太郎を見る。宗太郎は記憶を辿るようにして話した。

「確かに私は、小次郎がフィッティングルームを出てきた後、小次

郎の後をつけるために少しの間フィッティングルームから離れていました。戻った時には誰もいませんでした」

「じゃあその間に栄子さんがフィッティングルームに戻ってきて出て行ったのか！」

武上はグシャグシャと頭をかいた。

なんてタイミングが悪いんだ……！！

「和彦！なんでもっと早く本当のことを言わなかったんだ！警察がどれだけ人を動員して栄子さんを捜してたと思ってる！」

「俺のファンの悪戯かも、くらの理由じゃ警察はこいつを保護してくれないだろ。だったら犯人が捕まるまで自分の手元にこっそり置いておく方が安全だと思ったんだよ。犯人が警察内の俺のファンだなんてこともあるかもしれねーし」

武上の脳を、和彦のファンの婦人警官・鳥居の顔がよぎる。もちろん鳥居はそんなことは絶対にしないが、最近の警察の不祥事が武上を「うつ」と詰まらせた。

「そうこうしてるうちに、容疑者の小次郎が自殺だか他殺だか分かんねー死に方するし、警察に本当のことを話そうにも話せなかったんだよ」

「嘘つけ……お前、警察がてんやわんやしてるのを見て面白がつてただろ」

「まさかー」

「……」

全く信用ならない男である。

そう言えば以前和彦は公衆電話を使っていた。あれは自分の自宅に電話をかけて栄子と話していたのだろう。携帯からかければ携帯会社に履歴が残るから、用心したに違いない。

「お前は・・・本当に・・・」

武上は腹立たしいやら気付かなかった自分が情けないやらで地団太を踏んだ。

「まーまー、解決したんだからいいじゃん」

「よくない！上になんて報告したらいいんだ！」

「一時的な記憶喪失で街を彷徨ってたけど突然記憶が戻ってホテルに現れた、とも言っとけ」

「むちやくちや言っな！」

しかし和彦はいつも通りどこ吹く風だ。

そんな2人を見ている内に、小杉の涙も自然と止まっていた。

「小杉さん」

栄子が小杉に歩み寄った。小杉が頭を下げる。

「ご無事で何よりです」

「ええ・・・。残念だわ、あなたのプロデューサーで式を挙げたかったのに」

「申し訳ありません・・・」

「でも、あなたの希望通り、私はここで結婚式を挙げるわ。だから安心して」

「はい・・・ありがとうございます」

小杉の顔にようやく笑顔が戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2850x/>

アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

2011年12月26日21時57分発行